センター模擬試験

第２回　国語

解説と解答

【国　語】

【解答・採点基準】

（200点満点）

問題番号	設問	解答番号	正解	配点	自己採点
第1問	問1 (ア)	1	③	2	
	問1 (イ)	2	①	2	
	問1 (ウ)	3	④	2	
	問1 (エ)	4	①	2	
	問1 (オ)	5	③	2	
	問2	6	①	8	
	問3	7	④	8	
	問4	8	⑤	8	
	問5	9	④	8	
	問6 (i)	10	③	4	
	問6 (ii)	11	③	4	
第1問 自己採点小計				(50)	
第2問	問1 (ア)	12	②	3	
	問1 (イ)	13	③	3	
	問1 (ウ)	14	④	3	
	問2	15	①	8	
	問3	16	⑤	8	
	問4	17	②	8	
	問5	18	⑤	8	
	問6	19	① ※	5	
		20	② ※	5	
第2問 自己採点小計				(50)	
第3問	問1 (ア)	21	①	5	
	問1 (イ)	22	④	5	
	問1 (ウ)	23	③	5	
	問2	24	③	6	
	問3	25	⑤	7	
	問4	26	④	7	
	問5	27	②	7	
	問6	28	③	8	
第3問 自己採点小計				(50)	
第4問	問1 (1)	29	③	4	
	問1 (2)	30	①	4	
	問2	31	④	6	
	問3	32	④	6	
	問4	33	⑤	6	
	問5 D	34	②	5	
	問5 F	35	①	5	
	問6	36	⑤	7	
	問7	37	①	7	
第4問 自己採点小計				(50)	
自己採点合計				(200)	

※の正解は順序を問わない。

【解説】

第1問　現代文

【出典】

寺田寅彦「漫画と科学」（『電気と文芸』一九三一年三月）。なお、本文は、『寺田寅彦全集　第五巻』（岩波書店、一九九七年）に拠った。

寺田寅彦（てらだ・とらひこ）は、主に大正から昭和初期にかけて活躍した物理学者・随筆家。一八七八年東京に生まれたが、少年期を父の郷里の高知で過ごし、その後、熊本の旧制第五高等学校で、夏目漱石に英語を学び俳句の手ほどきを受ける。一九〇三年東京帝国大学物理学科を卒業、大学院に進み、翌年講師となる。音響学、地球物理学などの実験的研究に従事、尺八の音響学的研究で理学博士の学位を得る。一九〇九年には助教授となり、二年間ドイツに留学し、地球物理学を研修。一九一六年に東大教授となり、物理学、地球物理学、地震学などの領域で幅広く活動した。その一方、五高在学中より漱石を師と仰ぎ、いわゆる「理系」でありながら、漱石の門下の小宮豊隆、安部能成をはじめとする文学者、哲学者などとも親交を結び、随筆や俳句などにも優れた作品を残した。特に科学と文学を巧みに調和させた随筆の評価は高い。一九三五年に病没。

【本文解説】

本年度のセンター試験の第1問は、小林秀雄の「鐔（つば）」が出題された。これまでのセンター試験の第1問では、現在も活躍する筆者の比較的新しい評論から出題されることが多かったが、本年度は、およそ五十年前に書かれた随筆風の文章だった。これまでの出題傾向を考えれば、こうした古い文章からの出題がつづくとは考えにくいが、今回は本年度の出題を踏まえて、大正時代に書かれた文章から出題した。

本文は、物理学者である筆者が漫画について論じたものであり、そのタイトルが示唆するように、漫画についての筆者の考えが科学との比較を通して述べられたものである。今日でこそ、日本の漫画は、海外でも人気を博し日本の大切な文化産業の一つとして重視されてもいるが、本文が書かれた時代には、漫画は低級なものとしておとしめられていた。それに対して筆者は、漫画と科学の類似性を指摘しつつ、漫画のめざすものを明らかにすることで、漫画を低級なものとする世評を覆そうとしている。本文を読解していく際には、筆者が漫画と科学の類似性をどういう点に見出しているのかを、また漫画の存在意義をどう説明しているのかを的確に把握するように注意したい。

なお、本文を読む際には、ここで論じられている漫画が私たちが一般にイメージする現代の漫画とは異なるものであるということに注意してほしい。筆者の念頭にある漫画は、「鳥獣戯画」や「北斎漫画」に代表されるような戯画や風刺画である。

本文は、途中三箇所の空白行で、四つの部分に分けられている。その区分にしたがって、本文の内容を確認していこう。

1　漫画を論ずるにあたって（第1段落）

ここでは、漫画を論ずる前提として、漫画とは何かを定義したり、漫画とそれ以外の絵画を明確に区別することが難しいこと、仮に筆者が苦心して漫画を定義したところで、それは筆者個人の定義にすぎないことが確認される。そして、2以降で展開される漫画論が筆者の個人的な考えに基づくものであることが述べられている。

2　漫画と科学の類似性（第2～6段落）

ここではまず、漫画は何を対象・材料にするかということが述べられている。漫画の対象となるものは、人間か、あるいは人間化されたものである。そして漫画は、そうした対象の持つ特徴を抽象し誇張して表現する。たとえば、鼻の大きな人を対象とする場合、鼻を実際の大きさ以上に拡大して描いたり、鼻や小鼻の微妙な曲線を強調してみたりする。また、馬に乗っている猿を描いたとしても、その猿が擬人化されていれば、それは漫画なのである。（第2段落）

こう述べたあとで筆者は、漫画と科学は二つの点で似ていると主張する。ここが本文前半の重要な部分なので、以下の内容をしっかり理解してほしい。

○　漫画と科学の類似点、その一（第3・4段落）

漫画が表現する人間の形態的、精神的な特徴は、特異なものであると同時に、その特徴を共有する一つの集団の「普遍性」を「抽象」し、「型」として設定したものである。たとえば、愚かな政治家の姿が漫画に描かれていたら、そこには政治家という種類の人間が普遍的にもっている〈愚かさ〉という「抽象」的なものが、「型」として描かれているということになるわけである。（第3段落）

一方たとえば物理学者は、物体の複雑な運動を観察し、それをさまざまな運動に分解しその中の一つを抽出し他を捨象することで、「普遍的な力則（＝法則）」を導き出す。つまり科学者は、現象を観察し具体的な事象を「抽象」化することで、「普遍」的な法則を見出すのである。（第4段落）

ここまで読めば、漫画と科学がどういう点で似てい

るかがわかるだろう。要するに筆者は、**漫画も科学も、さまざまな事例から「抽象」化を行い「普遍」的なものを導き出す**という点で似ていると主張しているのである。その普遍的なものとは、漫画の場合は「型」であり、科学の場合は法則なのである。

○ **漫画と科学の類似点、その二**（第5・6段落）

漫画と科学のもう一つの類似点は、普遍性をつかみ出すときの方法が似ているという点である。筆者は、漫画家のそうした手法は「『学』（＝学問・科学）の方法に近いもの」だと述べる。（第5段落）

科学上の業績はもっぱら分析によって獲得されてきたと考えられがちだが、科学者が法則を発見する際には、直感の力を借りることが非常に多い。つまり、科学には分析だけではなく、直感も必要だというのである。同じように、漫画家の仕事はもっぱら直感によってなされていると考えられがちだが、漫画家も、たとえ無意識にしろ、直感で得た暗示を確かなものにするために分析の力を働かせているのである。つまり、**漫画家が対象の中に普遍的な要素を見出す際には、直感だけではなく、直感で得たものを確かなものにする分析も必要であり、その点で「学（＝学問・科学）」の方法に近い**というのである。（第5・6段落）

3 **人間の真を追究する漫画**（第7～14段落）

この部分では、漫画も科学も「真」を追究するものであるということが述べられる。そして筆者は、そうした観点にもとづいて、漫画とはけっして低級なものではないと結論づけている。

○ **「真」の追究**（第7～9段落）

第7段落では、やや意味のとりにくい語句がいくつか使われている。そこで、とりあえずこれらの意味を確定していこう。

まずは「一種の真」だが、これは「漫画」が「目的」としている「真」である。したがって第3・4段落の内容から、それは（人間というもののもつ普遍的な真実）といったものだとわかる。

次に「直接な狭義の美」だが、これが何を指しているのかは、ここだけではわかりにくい。しかし第14段落の内容から、それは一般的な絵画が目指しているものだとわかる。

以上のことから、第7段落の内容は次のようにまとめることができる。**漫画は、一般の絵画のように「直接な狭義の美」を追究するのではなく、人間にとっての普遍的な真を追究するものであり、そこに「間接な広義の美」が現れる。科学のめざすものも「真」であり、科学者にとってはそれは「美」でもある。**これが、本文後半部分で主に筆者が主張しようとしていることである。（第7段落）

次の第8段落では、漫画は「実物に似ていない」が、そのためにかえって実物以上に「実物に似る」ものになっており、その点でも「真の表現」であるということが述べられている。この部分の内容はやや難しいが、これについては**【設問解説】**の**問4**で詳しく説明することにしたい。

さらに筆者は、科学の法則が「科学者の個性と切り離され」ているのに対して、漫画の表現は「作者の個性の香が高くなる」と述べている。しかしここでも筆者は、やはり漫画と科学は似ていると主張する。たしかに一人一人の漫画家は個性的だが、それらを集団として見た場合、そこで表現されているものは、科学と同様「『真の』一面」だというのである。（第9段落）

○ **技巧よりも「真」**（第10・11段落）

科学が純化された言語や記号を用いるのに対して、漫画は線や点や色を用いて、言語では表すことのできない観念の表現をする。しかし、その表現技術の「巧拙（＝上手いか下手かということ）」はさほど大事なことではない。重要なのは、そこで表されている「真の種類や程度」なのである。（第10段落）

そのため、あまりに技術が巧みな漫画家はかえって内容が乏しいことも少なくないと、筆者は述べているのである。（第11段落）

○ **漫画と絵画との微妙な違い**（第12～14段落）

筆者は、「真」を備えた本当の漫画は、「低級なポンチあるいはくすぐり画」とは大きく異なるものだと述べている。筆者は、漫画の本質は滑稽ではないと考えているのである。（第12・13段落）

その一方で筆者は、漫画はミレーの田園風俗画に代表される一般の絵画と異なる部分をもつとも考えている。もちろん両者の境界線ははっきりしているわけではないが、一般に絵画というものは「美」を専ら追究する。これに対して漫画のほうは、あくまでも「真」を追究するものであり、そのため、それは絵画の美のような「狭義の美」をもつ場合もあればそうでない場合も出てくると、筆者は考えているのであろう。（第14段落）

4 **漫画の存在意義**（第15・最終段落）

最後に、漫画を低級なものとする世評に対して、筆者の考えが示されている。

芸術や科学といった人間精神の所産物と比較して、漫画を低級なものと考える根拠は見出せない（第15段落）。たとえば鳥羽僧正の鳥獣戯画からは人間の痴愚

を教えられ、北斎漫画からは封建時代の社会の不思議な心理を教えられる。こうした例に見られるように、漫画は人間のさまざまな「真」を表現しており、私たちは漫画からそうした「真」を学ぶことができる。つまり、漫画は、聖賢の教えには及ばないにしても、それに準ずる価値をもつものだというのである。（最終段落）

□ **まとめ**

本文では一貫して、漫画は科学と似ているということが述べられている。もちろん、両者の間には違いもある。しかし、漫画の本質は「普遍」的な「真」の追究にあり、その点で漫画は科学に似たものだというのが、筆者の主張なのである。

最後に、論の展開を簡単にまとめておこう。

2・漫画も科学も、対象を抽象化することで、普遍的なものを導き出す（第2～4段落）。
・漫画も科学も、その方法において、直感と分析の両方を必要とする（第5・6段落）。

↓

3・漫画は、対象を実物どおりには表現しないが、そのことでかえって、科学と同様「真」の表現になりうる（第8段落）。
・絵画は専ら狭義の美を追究するが、漫画は真を追究し広義の美にかかわり、その点で両者には異なるところがある（第14段落）。

↓

4・漫画は、科学や芸術と比べて、低級なものではない（第15・16段落）。

問題

【設問解説】

問1　漢字の問題

(ア)は、〈きわだって目につくさま、著しいさま〉という意味で、「顕著」。①は「険悪」。②は「献上」。③は、〈隠していた悪事や秘密が人に知られること〉という意味で、「露顕」。したがってこれが正解。④は「派遣」。⑤は、〈武力や権謀をもって競争者を抑えて得た権力〉という意味で、「覇権」。

(イ)は、〈事業や研究などで成し遂げた実績〉という意味で、「業績」。①は、〈糸を紡ぐ〉という意味の「紡績」で、これが正解。②は「解析」。③は、〈別れを惜しむこと〉という意味で、「惜別」。④は、〈人がたどってきた人生の跡、物事がたどってきた動きの跡〉という意味で、「軌跡」。⑤は、〈次々と積み重なること〉という意味で、「累積」。

(ウ)は、〈みがきをかけて優雅、高尚なものにすること〉という意味で、「洗練」。①は、〈学識の浅いこと〉という意味で、「浅学」。②は、〈病気に感染しているが、まだ症状が現れていないこと〉という意味で、「潜伏」。③は「占有」。「占有率」で、〈そのものがある分野に占める割合〉という意味になる。④は「洗面」で、これが正解。⑤は「先例」。

(エ)は、〈とびはねること〉という意味で、「跳躍」。①は、〈めざましい勢いで進歩、発展すること〉という意味で、「躍進」。したがって、これが正解。②は「薬剤」。③は「適役」。④は「意訳」。⑤は「要約」。

(オ)は、「功利」。「功利的」で、〈その行為が自分の利益になるかどうかを先ず考えるさま〉という意味になる。①は、〈互いに物品の交換や売買をすること〉という意味で、「交易」。②は、〈相手の主張ややり方に反対して弁じ立てること〉という意味で、「抗弁」。③は、〈あることのために成し遂げた、すぐれた働き〉という意味で、「功績」。したがってこれが正解。④は、〈古いものを新しく改めること〉という意味で、「更新」。⑤は、〈こだわること〉という意味で、「拘泥」。

問2　漫画と科学における、対象の取り扱い方の類似性について答える問題

漫画と科学のどちらから考えていってもいいのだが、傍線部直後の第4段落で科学のことがまとめて説明されているので、まずはそこから考えてみることにしよう。

ここでは物理学者が例として取り上げられ、物体の複雑な運動を観察し、それをさまざまな運動に分解しその中の一つを抽出し他を捨象することで、普遍的な法則を設定するなどと述べられている。つまり、科学は、日常の現象を観察し（→a）、具体的な事象を抽象化することで（→b）、普遍的な法則を見出す（→c）のである。

では、こうした科学のあり方と類似する、漫画の対象の取り扱い方はどういうものか。それに関しては、おもに第2段落および傍線部の直前に説明されている。

第2段落にあるように、漫画は、人間および人間化された非人間を対象とし、対象の「特別な部分を抽象してその部分を誇大し」て表現する（→B）。そして、傍線部の直前にあるように、漫画が表現する人間の特徴は、特異なものであると同時に、「その特徴を共有する一つの集団の普遍性を抽象してその集団の『型』を設定する」（→C）ものである。ただ、傍線部の前だけでは、aに対応する説明がない。そこで傍線部の後を探してみると、第5段落の

冒頭に、「優れた観察力をもった漫画家が街路や電車の中で十人十色の世相を見る」などとある。つまり、漫画は、十人十色（＝人によってそれぞれ異なった個別）の人間を観察し（→A）、その特徴を抽象して表現するなかで（→B）、その特徴を共有する集団の普遍性を型として描き出す（→C）というのである。

以上の内容をあらためて整理すると、次のようになる。

漫画
A　個別の人間を観察し
B　その特徴を抽象して表現するなかで
C　その特徴を共有する集団の普遍性を型として描き出す

＝

科学
a　日常の現象を観察し
b　具体的な事象を抽象化することで
c　普遍的な法則を見出す

したがって、以上の点を踏まえた説明になっている①が正解。

②は、科学が「そこに見られる特徴を誇張したものを法則として表現する」が、不適当。科学は、日常目撃される現象を抽象化して法則を見出すが、特徴を誇張したりはしない。第2段落にあるように、特徴を誇張するのは漫画である。

③は、科学が「普遍的な法則によって日常的な現象そのものを表現する」が、不適当。第4段落の最後にあるように、法則は「実際に日常目撃する現象その物の表示ではない」のである。また、この選択肢は〈法則によって現象を表現する〉という方向性になっているが、本文で述べられている科学のあり方は、どちらかというと〈現象から法則を導き出す〉という方向である。こうした観点から見ても、この選択肢は誤りだといえるだろう。

④は、科学が「それぞれの現象の特異性までも法則化する」が、不適当。そうしたことは、本文に書かれていない。そもそも法則は普遍的なものでなければならず、特異性とは相いれないものである。たしかに、漫画に関しては、「それぞれの人間の特異性を描き出す」といった内容が本文に記されているが、それは科学との類似性ではない。あくまでも類似しているのは、普遍性に関してである。

⑤は、漫画が「人間を対象にしてその心理的現象だけに着目し」が、不適当。第3段落にあるように、漫画は「人間の形態並びに精神的の特徴」を表現するものなのである。

問3　漫画と科学における、方法の類似性について答える問題

まず、傍線部の「この要素をつかみ出す方法」がどういう方法なのかを確認しておこう。傍線部の直前に「優れた観察力をもった漫画家」が複雑な対象を分析して「その中のある型の普遍的要素」を見出すなどとあるように、**それは、漫画家が観察を通して対象の中に普遍的な要素を見出す方法**（→a）のことである。

次に、この漫画家の方法が「『学』の方法に近い」とはどういうことかを考えよう。本文で説明されている「『学』の方法」といえば、科学の方法しかない。傍線部の次の第6段落にあるように、科学上の業績は「分析」によってのみ得られるものと考えられがちだが、それは誤りで、優れた科学者が法則を発見する際には、「直感」の力を借りることが非常に多い。つまり、**科学者が普遍的な法則を発見する方法は分析とともに直感の力も働いている**（→c）のである。

そして第6段落後半には、「漫画家の抽象（＝普遍的な要素の抽出）」も「直感のみによるとは考えられない」ものであり、たとえ無意識にしろ、「直感で得た暗示」を確かなものにするための「分析」も必要だと述べられている。つまり、**漫画家の方法も、科学の方法と同じように、直感と分析の両方を必要とする**というのである（→b）。

以上の内容をあらためて整理すると、次のようになる。

a　漫画家は、観察を通して対象の中に普遍的な要素を見出す。
b　そのような普遍性を抽出するという作業には、直感だけでなく、直感で得た暗示を確かなものにするための分析も必要である。
c　法則を発見する科学の方法にも、分析とともに直感の力が働いている。

したがって、以上の点を踏まえた説明になっている④が正解。

①は、漫画家が「分析を意識的に心がけている」が、不適当。第6段落には、漫画家は「たとえ無意識にしろ」、直感で得た暗示を確かなものにするために分析を必要とすると述べられている。

②は、「直感」についてだけ説明して「分析」についていっさい言及していない点が、不適当。

③は、漫画家が「直感よりも分析を重視する」というのが、不適当。「直感」と「分析」の両方は必要だが、どちらがより重要かといったことは、本文のどこにも書かれていない。

⑤は、「法則の効率的な発見に努める科学者」が、不適当。そうしたことは本文のどこにも書かれていない。

問4　漫画のもつパラドクシカルな特質について答える問題

傍線部直後の「パラドクシカル」とは、〈逆説的〉という意味。「逆説」とは、一見すると矛盾しているようなありようのことをいう。傍線部は〈実物と似ていないため逆に実物に似ている〉という矛盾した言い方になっており、この問題では、それがどういうことかが問われているのである。

まず、傍線部前半の「漫画が実物と似ない」とはどういうことかを考えてみよう。これがどういうことを意味しているかは、傍線部の前後には述べられていない。そこで本文を広く見渡し、「漫画が実物と似ない」ことに関わる説明がないか探してみる。すると、それに関連する説明が第2段落でなされていることがわかる。すなわち、**漫画は、対象の持つ特徴を実際以上に拡大したり誇張したりして表現する**（→a）。そのために漫画は「実物と似ない」のである。

次に、傍線部後半の「実物に似る」とはどういうことかを考えてみよう。傍線部直前の一文に「漫画が実物に似ていないにかかわらず真の表現である」とあるが、これが傍線部とほぼ同じことを言っているのはわかるだろう。ここから、〈実物に似る＝真の表現〉ということがわかる。つまり、漫画が「実物に似る」というのは、**漫画が対象の「真」の姿を表現している**（→b）ということなのである。

以上のa・bをつなぎ合わせると、傍線部の意味は次のようなものだとわかる。

> a　漫画は、対象の持つ特徴を実際以上に拡大、誇張して表現する。
>
> b　そのことでかえって、対象の特徴（＝真の姿、本質）をうまく表現する。

たとえば怒っている人間の姿を描くとき、漫画では、それが現実離れしているほど誇張して表現される。しかしそのことでかえって、人間のもつ〈怒り〉というものの本質が表現される。傍線部で述べられているのは、こうしたことであろう。以上の内容を踏まえた説明になっている⑤が正解である。

①は、「複雑に見えた対象の本質がかえって単純なものであることを浮き彫りにしている」が、本文に述べられていない内容である。

②は、漫画が「対象の特別な部分を具体的に描写しがちだ」が、不適当。第2段落にあるように、漫画は「特別な部分を抽象してその部分を誇大しあるいは挙揚して表示する」のである。

③は、まず「漫画は対象の持つ特徴を月並な慣用手段によって表現する」という説明が、不適当。たしかに第2段落に「月並な慣用手段」という言葉が使われている。しかし、そこでは、漫画に「月並な慣用手段」が用いられる場合もあることが指摘されているのであって、漫画にいつも「月並な慣用手段」が用いられるわけではない。また、「対象に潜在している特異性を暴くことになる」というのも、bの内容から外れている。

④は、「科学の法則に根差した物事の実相が明らかになる」が、不適当。たしかに漫画は「物事の実相」を明らかにするが、その実相が「科学の法則に根差した」ものだといったことは、本文のどこにも書かれていない。

問5　筆者の考える「本当の漫画」の特質について答える問題

本文全体を通して筆者が漫画のことを高く評価していることはいうまでもないが、その最も大きな理由は、**漫画が人間の「真」を表現している**からである（→b）。このことは、**問2**や**問4**などでも確認したとおりだ。

次に傍線部以降、とくに第14段落に着目し、漫画と絵画の関係を確認してみよう。第14段落の冒頭には、「例えばミレーの出園風俗画とスタンランの漫画との間に或（あ）る区別を感じない訳ではない」とある。これは、**「漫画」にはいわゆる「絵画」とは違う部分がある**ということであろう（→a）。

では、その違いとはどういう違いか。これについては、第14段落の後半に述べられている。ミレーに代表される絵画は、「『美』に専（もっぱ）らなもの」、つまり「狭義の美」をひたすら表現したものである。これに対して漫画の方は、「『真』に忠なるがために狭義の美の境界線の内外に往還するもの」だという。この表現の意味はなかなか難しいが、〈「真」を表現していくなかで狭い美の枠を越えていくこともあるもの〉といった意味だろうと推測できる。つまり**漫画は、「真」を表現していくなかで、広義の美を表現する場合もある**ということなのだろう（→c）。

そして筆者は、以上のことにもとづき、第15段落

で、**芸術や科学と比べて漫画が低級なものだということはできない**と述べている（→d）。

以上の内容をもう一度整理すると、次のようになる。

> **a**　漫画は一般の絵画とは違う。
> **b**　漫画は人間の真を追究する。
> **c**　（bをするなかで）漫画は「広義の美」も表現している。
> **d**　芸術や科学などと比較して、漫画を低級なものと考える根拠は見出せない。

したがって、以上のa～dを踏まえた説明になっている④が正解。

①は、漫画が「絵画よりもむしろ自然に関する真を追究する科学に近い」というのが、本文から確定できない内容である。また、「画家の技能を重視しがちな絵画」も不適当。本文には、漫画では技能が最も重視されるわけではないということは述べられているが（第10段落）、だからといって、絵画において画家の技能が重視されるということはいえないはずである。

②は、「描き手の技術の巧拙が作品の価値を決定する重要な要素になる」が不適当。第10段落に「その利器の使い方の巧拙はその画家の技能を評価する目標の一つになるが、それよりも重大な標準は、それによって表わすべきものの、真の種類や程度にある事は勿論である」とあるように、技術の巧拙は技能を評価する目安の一つではあるが、それ以上に重要な評価の基準は表現される内容である。また、技術の巧拙が作品の価値に与える影響に関して、漫画と一般の絵画を比較した説明などは本文のどこにも書かれていないので、その点から不適当だと判断することもできる。

③は、漫画が「滑稽をその本質とするものであると考えている」というのが誤り。第13段落に「私は滑稽という事がここにいわゆる漫画の本質的要件とは考えていない」とある。

⑤は、漫画が「観念の表現はできない」というのが、第10段落の「漫画家は……観念の表現をするための利器を持っている」という記述に反するので、不適当である。

問6　本文の表現上の特徴と、全体の構成について答える問題

センター試験の第1問（評論）の問6の出題形式が、年ごとにいろいろ変わっている。06年から二年つづけて〈本文の論の展開を問う問題〉が出題され、08年には〈筆者が事例や他の文献を取り上げた意図を二つの選択肢群に分けて問う問題〉になり、09年は〈本文の特徴を問う問題〉になり、10年は〈――記号の効果と、本文の構成を二つの選択肢群に分けて問う問題〉となり、11年も〈波線部の表現効果と、論の進め方を二つの選択肢群に分けて問う問題〉となり、12年には〈本文の論の展開を問う問題〉に戻った。しかし本年度は、再び〈波線部の表現効果と、本文の構成を一つの選択肢群に分けて問う問題〉となっている。

ただし、形式がいろいろと変化しているといっても、実際に問われていることは従来の〈内容合致問題〉と大差のないものであり、受験生は形式の違いに過剰に神経質になる必要はないだろう。

(i)　**本文の表現上の特徴を問う問題**

こうした問題では、一つ一つの選択肢の説明を本文の記述と慎重に照らし合わせ、消去法を使って解答を確定していくことが大切である。順に選択肢を検討していこう。

①「わかりやすさという漫画のもつ魅力を逆説的に読者に示そう」が、不適当。「わかりやすさ」が漫画の魅力だといった説明は、本文のどこにも書かれていない。また、筆者は傍線部Cで漫画のもつ逆説的な性質については説明しているが、筆者の読者に対する語り口が「逆説的」だというわけではない。

②「科学上の『真』はカッコつきで、漫画に関わる真はカッコなしで表記されている」が、不適当。たとえば第4段落は全体が科学に関する説明になっているが、その最後の部分には「この種の方則は……『真』の宣言であって、それが真なるにもかかわらず……」とあるように、科学上の真に関して、カッコつきとカッコなしの両方が用いられている。また、たとえば第8段落には「漫画が実物に似ていないにかかわらず真の表現であるという事は、科学上の真というものに対する……」とあるように、カッコなしの真が漫画と科学の両方に使われている。したがって、この選択肢が指摘するような使い分けはなされていない。

③「漫画家の説明に『微分』、『無限項の和』などの数学用語が使われている」という説明は、第9段落にもとづいており、正しい。また、「科学と漫画の類似性」については2を中心に説明されており、「漫画を低俗だと見なす風潮とは異なる見方を提示しようとする筆者の思い」は第15段落で明確に説明されている。数学用語の使用にそうし

た筆者の思いが反映されているかどうかは判断に迷うところだが、それを明確に否定する根拠がない以上、「筆者の思いが反映されているとも考えられる」という解釈は誤りとは言えない。したがってこれが正解である。

④「絵画について該博な知識を持っていること」を示すことと、「漫画を擁護する筆者の主張を権威づけ」ることとの間には、とくに関係があるわけではない。したがって不適当である。

(ii) **本文全体の構成のとらえ方を問う問題**

本文全体の構成を簡単に振りかえっておこう。まず1では、漫画を論ずるにあたって前提となる筆者の考えが述べられていた。2では、漫画と科学の類似性が具体的に説明されていた。3では、漫画の目的が人間の真の追究にあることが論じられていた。そして最後の4では、漫画を低級なものとする世評を覆そうという筆者の思いが述べられていた。

割かれている字数からも明らかなように、本文の中心をなすのは「漫画と科学」という主題を論じた2や、それを発展させた3である。1・4では、考察の前提となる筆者の考えや最終的な筆者の思いが述べられていた。したがって、こうした点を踏まえた説明になっている③が正解。ただし、この問題でも、(i)と同じように、消去法を使って解答を確定していくことは有効な方法である。

① 「最初の三つの部分でそれぞれ独立した内容を論じ」が、不適当。すでに説明したように、1は、2・3での議論の前提となることを述べたものであり、3も2の議論を踏まえたものなので、「三つの部分でそれぞれ独立した内容を論じ」ているとは言えない。

② 「最初の二つの部分で一般的な考え方について説明し」が、不適当。とくに2で述べられていることは、筆者によるかなり独自な見解である。

④ 「最初の部分で筆者の主張が示され」が、不適当。すでに説明したように、1は、2・3での議論の前提となることを述べたものであり、本文の筆者の中心的な主張は2以降で展開されている。したがって、「残りの三つの部分でそれを補強する議論が展開される」というのも不適当である。

第2問　現代文

【出典】

矢田津世子の小説「茶粥の記」の一節。ただし本文には一部省略した箇所がある。本作は、雑誌「改造」一九四一年（昭和一六年）一月号に発表された。今回の本文は、講談社文芸文庫『神楽坂・茶粥の記』（二〇〇二年）に拠っている。

矢田津世子（やだ・つせこ）は、昭和初期に活躍した小説家。本名は矢田ツセ。一九〇七年（明治四〇年）、秋田県の五城目町に生まれる。小学校三年生のときに一家で東京に移り住み、麹町高等女学校を優等で卒業した後、一度は日本興業銀行に就職したが、彼女の文才を評価していた兄の後押しを受け、文壇に身を投じる。一九三六年（昭和一一年）、「神楽坂」で第三回芥川賞候補となり、その後も数々の作品を発表したが、一九四四年（昭和一九年）、結核によって三六歳の若さで他界した。今回の出典となった「茶粥の記」にもいえることだが、彼女の作品には、郷里である秋田にゆかりのある人物がしばしば登場する。

【本文解説】

物語は、「清子」が「姑」とともに、「良人の遺骨」をもって郷里の秋田へ引き上げようとしているという話から始まる。清子の良人は区役所の戸籍係りだったが、つい最近、四十一歳の若さで他界したのだ（21行目）。夫婦の間に子供は無かった（80行目）。

なお、「姑」という漢字は一般には「しゅうとめ」あるいは「しゅうと」と読む。そんなところからも、本文の「姑」というのは、清子の良人の母親であり、清子から見れば義母に当たるということがわかるだろう。また、原作にも明確には書かれていないのだが、清子と良人はもともと同郷で、結婚してから東京に出てきたのだと思われる。

1　亡き良人についての逸話など（1～60行目）

ここでは、本文の記述内容の順序にはこだわらず、良人と清子の人物像などについて、整理してみることにしたい。

○　良人の人物像

清子の良人は、区役所の職員だったが、その一方では「食通として役所の人たちや雑誌の上などで名が知られていた」（4～5行目）。つまり彼は、いまでいうグルメ雑誌の類に文章を書いていたのである。

しかも彼は、旨いものについて語って聞かせるのも巧みだった。役所の昼休み、同僚たちの話が食べ物の話題になると、良人は、たとえば鳥取の夏牡蠣や能登の鮑がいかに旨いかといったことを、臨場感たっぷり

に話して聞かせる。聞き手のなかには、「その話で一杯やりたくなった（＝酒を飲みたくなった）」などと喜ぶ者もいたほどなのである（31～49行目）。

ところが良人は、そうした旨いものを実際に食べたことがほとんどなかった。良人の話は「記憶力と想像力」によるもので、「たとえば何処かで聞きかじった話だの雑誌や書物などで眼についたのをいつまでも忘れずにいて、折りにふれ、これに想像の翼を与え」、美食の話をしていたのだ（50～52行目）。

しかも良人がそうした記憶力と想像力を働かせるのは、人に語って聞かせるときだけではなかった。たとえば朝の出勤の電車のなかで、彼は懐石料理のあれこれを味わっているつもりになり、大きな満足感を得るのである（52～55行目）。

ここで注意してほしいのは、こうした良人の奇妙なありようのことを役所の同僚たちが知っていたかどうかについては、本文にはまったく述べられていないという点だ。しかし妻である清子は、彼の話が想像によるものだということを知っていた。だからこそ彼女は、良人に対して「あなたって変ね」と言って笑ったりしていたのである（56～57行目）。

○ 亡き良人と清子との関係

清子と良人とは、ひとことで言えばとても仲の良い夫婦だった。清子は旨い粥を炊くのが得意だったが、良人にその味を誉められると、「一途な清子は無暗とお粥をこしらえる」といった具合である。良人が生きていた頃、清子は彼と、粥専門の店でも始めようかといった冗談を言い合ったことがあった。そうした言い合いは、清子にとって、「楽しいやりとり」だったのである（3～20行目）。また、旨いものが好きな良人にもたせる弁当を清子があれこれ工夫するといったエピソードからも、彼女の良人への愛情の深さといったことがうかがえる（25～27行目）。

そして、とくに注目しておきたいのは59・60行目である。食べたこともないものを想像だけであれこれ語るという良人は、常識的にいえば奇妙な人物だといえるかもしれない。しかし清子は、そんな良人に「神秘めいたものを感じて」、彼のことを「尊敬していた」のである。

2 清子と姑との密接な関係（62～86行目）

ここでは、郷里に出発する前の晩の清子と姑の様子や、姑についての清子の回想が描かれている。姑は、郷里への帰途に温泉に寄るのをこのうえないほど楽しみにしている。そして清子は、そんな姑に対して、髪を結ってやったりするなど、あれこれとこまめに世話を焼いている。

亡き良人との間に子供がいなかったこともあって、清子と姑との関係は、血のつながっていない義理の母と子であるにもかかわらず、きわめて密接なものだった。しかも「良人に逝かれてからというもの清子と姑の気持は一そう寄り添いあって、いわば二人はお互の突っかい棒になっていた」（74～75行目）。だから清子は、郷里に帰ってからも、再婚などせず、小学校の教師をしながら姑の面倒を見ていこうと心に決めていたのである（82～83行目）。

こうした清子の生き方に、違和感を覚えた人もいたかもしれない。しかし彼女は、亡き良人との想い出を大切にしながら、その良人の母親とともに生涯を送ることを決意しているのである。このような清子のありようから、彼女の「一途な」性格や（5行目）、近代的な個人主義がさほど定着していなかった戦前の日本の社会事情といったことを、読みとることも可能であろう。

3 亡き良人との別れを惜しむ清子（84行目以降）

良人と暮らしていたこの家とも「今夜一と晩の名残りか」と思った清子は、玄関に行って、いつも良人の帽子が掛かっていた帽子かけにさわってみた。そして清子は、あたかもそこに良人がいるように感じ、その良人の俤に向かって「もう、お別れよ、お別れよ」と言うのだった（84～90行目）。

さらに清子は、良人の書いた旨いものについての文章が載っている雑誌を手に取る。そこには、白魚のおどり食いをはじめとするさまざまな贅沢な料理のことが、巧みな文章で描かれていた。もちろんこうした料理も、良人は実際には食べたことがなかったのだろう。だから清子は、「『嘘ばっかり、嘘ばっかり』と見えない良人を詰った」。けれども、「不思議に良人の文章から御馳走が脱け出して次ぎつぎと眼前に並」ぶような気がして、「清子はつばが出てきて仕方がなかった」のである。

□ まとめ

とくに読みにくいところはない文章だと思う。物語のすじを丁寧に追いながら、右で説明したような登場人物の人物像や、人物同士の関係性といったことを正確に読みとることができれば、おそらく設問にも正解できるはずだ。ただし本文には、登場人物の心情がストレートに述べられている部分はあまりない。したがって設問に答える際には、人物の心情などを勝手に想像したりしないよう、注意してほしい。

もうひとつ、できれば気づいてほしいのは、小説の視点が一定ではないという点だ。物語は、清子と良人の二人が登場する場面では、清子の視点に即して描か

れている。ところが役所での食事の場面などは、あたかも清子以外の第三者の視点から描かれているかのようになっている。そして、良人の旨いものについての話が想像にもとづいたものでしかないという話題は、清子の視点に即して語られている。したがって、清子は良人が旨いものを実際にはほとんど食べたことがないということを知っていることになるが、役所の同僚たちがそうしたことを知っているかどうかは、本文からはわからないのだ（もちろん、まったく知らなかったとも解釈できるし、知っていてあえて面白がって話を聞いていたと解釈することもできる）。できればこうした点にも気を配りながら、本文の面白さを味わってみてほしい。

【設問解説】

問1　語句の意味を答える問題

問題

大学入試センター試験の小説問題では、毎年、この問1のような問題が出題されている。これは基本的には読解問題ではなく、**傍線部の言葉の語義そのものを問う知識問題**である。単に傍線部前後の文脈だけを根拠にするのではなく、**傍線部の語句それ自体の辞書的な意味を推察し、その意味から外れていない選択肢を選ぶ**ということが、この問題を解く際には最も重要である。

(ア)では、「腰掛け」という語の意味が問われている。「腰掛け」とはもちろん、ちょっと休んだりするときに腰を掛けるための台や椅子などのことを指す言葉だが、そこから転じて、〈長くとどまらず、一時的に身を置いておくだけの職や地位〉という意味で使われる。たとえば、「正式な就職先が決まるまでの腰掛けとしてアルバイトをする」というふうに使われる言葉である。したがって、正解は②ということになる。

(イ)の「風」は「風采（ふうさい）」と同じで、〈人の見た目、なりふり、姿〉といった意味。したがって、正解は③になる。人物の見た目がぱっとしないことを「風采があがらない」というが、そうした言い回しが連想できれば、容易に正解できただろう。

(ウ)では、「手廻し」と「気が気ではない」という二つの言葉の意味が問われている。「手廻し（一般的には「手回し」と表記する）」とは、〈準備、手配り、手はず〉といった意味。したがって「手廻しをよくしておかないと」というのは、〈あらかじめよく準備をしておかないと〉という意味になる。そして「気が気ではない」というのは、〈気になって落ち着かない〉という意味である。

以上の二つの言葉の意味を両方とも正確に言い換えている選択肢は④だけしかなく、これが正解である。①・②・⑤は、「手廻しをよくしておかないと」の部分は正しく言い換えられているが、「気が気ではない」の言い換えが正しくない。③は逆に、「気が気ではない」を言い換えた部分は正しいが、「手廻しをよくしておかないと」の言い換えが間違っている。

問2　傍線部そのものの意味・内容を答える問題

ここでは、傍線部そのものが「どういうこと」かが問われている。こうした問題では、その**傍線部の意味・内容を過不足なく説明した選択肢を選ぶ**ということが大切である。この傍線部は、a「こうした楽しいやりとり」、b「今となっては」、c「（a も）詮（せん）ない繰り言になってしまった」という三つの要素に分けることができる。以下、このa～cがどういうことを言っているのかを、本文に即して考えてみよう。

a　「こうした楽しいやりとり」とはどういうことか

これはもちろん、傍線部直前の13～19行目の内容を指している。まだ良人が生きていた頃、清子は、粥の話などをめぐって、彼と「楽しいやりとり」をしていたのである。ここで注意してほしいのは、二人の会話が本気の口論や議論などではなかったということだ。**【本文解説】**1の後半でも確認したとおり、二人はきわめて仲の良い夫婦であった。そんな二人は、互いをからかい合い、冗談を言い合って楽しんでいたのである。

b　「今となっては」とはどういうことか

これは単純に言い換えれば、〈良人が亡くなってしまった今となっては〉という意味である。ここには、良人が生きていた頃のことを思い出し、懐かしんでいる清子の心情が表現されていると考えてよいであろう。

c　「（a も）詮ない繰り言になってしまった」とはどういうことか

ここでは、(i)「詮ない」と(ii)「繰り言」という二つの言葉の意味が問題になる。

まず(i)の「詮ない」だが、これは〈しかたがない、どうにもならない〉といった意味。たとえば「いまさらどうにかしようとしても詮ないことだ」というような使い方をする。

次に(ii)の「繰り言」だが、これは〈同じことを繰り返してくよくよ言うこと、愚痴〉などの意味。たとえば「老いの繰り言」などといった使い方をす

る。

右の(i)・(ii)から、「詮ない繰り言」とは〈どうにもならない愚痴のような言葉〉という意味だということがわかるだろう。

以上のa～cの意味をあらためて確認すると、次のようになる。これが傍線部の意味である。

a　良人との間で、冗談を言い合ったり、からかい合ったりといったことを楽しんだが
b　良人が亡くなった今、そうしたことを懐かしく思い出したとしても
c　それはどうにもならない愚痴のようなものになってしまう

正解は、これらの内容に最も即している①ということになる。「痴話喧嘩」という言葉にとまどった人もいるかもしれないが、「痴話」とは、〔仲の良い恋人同士などがじゃれ合うようにして行う会話〕という意味。一般に「痴話喧嘩」とは、けっして本当の喧嘩ではなく、仲の良い二人だからこそ可能な戯れ合いのことを指すのである。

②は、a・bの内容には即しているものの、cの説明が間違っている。「詮ない繰り言」になってしまうというのは、「ありきたりの会話」にしか思えなくなるということではない。

③も②と同様、a・bの内容には即しているが、cの内容と対応していない。傍線部で述べられているのは、「粥をこしらえる」ことがどういう行為になってしまったのかということではなく、かつての良人との「やりとり」が今ではどういうものに感じられるようになったかということなのだ。

④は、aの「やりとり」のことを「会話」だけでなく「生活」ともしている点もやや不正確だが、それ以上にcの説明がおかしい。「詮ない繰り言」になるというのは、「自分がつまらないことばかりを言う」ようになったということではなく、かつての良人との「やりとり」が今になって思い出してもしかたのないものになったということである。

⑤は、「議論を戦わせた」がaの内容にそぐわない。また、「過ぎ去った楽しい想い出でしかない」というのも、cの説明になっていない。

問3　良人の人物像や、良人と周囲との関係などについて答える問題

設問を読んだだけでは、「良人の食通ぶり」のどういう点について答えればよいかわからない。このような漠然とした設問に答える際には、とくに消去法が有効である。「良人の食通ぶり」については主に25～60行目に述べられているので、この部分の内容と各選択肢を照合し、明らかな誤りや、本文から正しく推測できない内容を含んだものを排除し、最も良い選択肢を選ぶようにしたい。

①だが、まず「人々が切り詰めた生活を余儀なくされていた時代」というのは問違いではない（これについては28～30行目に述べられているし、リード文を見れば、この小説が戦時色の濃くなってきた時代に発表されたものだということもわかるだろう）。また、良人が旨いものの話を「熱い口調で語って聞かせ」、そのことで「周囲の人々から喜ばれていた」というのも間違ってはいない。しかし、「かつて食べたことのある美食の味」が大きく誤っている。美食についての良人の話は、ほとんどが「記憶力と想像力」によるものだったのである（50～52行目）。

②は、まず美食について語る良人の口調を「ものものしい」としている点が正確ではない。「ものものしい」とは〈もったいぶった、いかめしく大げさな〉といった意味だが、良人の口調にはむしろ親しみやすさのようなものがあるというべきだろう。さらに、「その語り口の上手さゆえに、清子からも役所の同僚たちからも、一種の尊敬の念をもって見られていた」というのが間違い。清子が良人を「尊敬していた」ことは59行目に書かれているが、同僚たちが尊敬していたかどうかは、厳密にはわからない。また本文中には良人が清子の前で旨いものについて語る場面はないのだから、清子が良人の「語り口の上手さゆえに」良人を尊敬していたかどうかということも、本文から確定できない内容だということになる。

③は、「役所の人々」が良人の語る美食の話のことを「半ば嘘であるとわかって」いたというのが、本文から確定できない内容。これについては、**【本文解説】**の「**まとめ**」の後半部分で説明したとおりである。

④は、選択肢前半の内容こそ正しいものの、「周囲の同僚たち」が「そうした良人の独特な考え方に興味を示していた」というのが、本文から読みとれない内容である。これについても、③と同様**【本文解説】**の「**まとめ**」の後半部分を参照してほしい。

⑤だが、「情報と想像力だけを頼りにして頭のなかに美食の世界を思い描くことのできる良人」は、もちろん50～55行目の内容などと合致している。そんな彼の「才能は清子から仰ぎ見られて（＝敬われて）いた」というのも、59行目の「良人に神秘めいたものを感じて、やはり尊敬していた」と合致している。さらに「その想像の世界を語る言葉も巧み

で、良人は周囲の人々からも評価されていた」というのは、良人の話を聞いて食欲をそそられる人がいるといった場面（47～49行目）などに即した内容だといえる。以上のことから、この⑤が正解の選択肢だということがわかる。

問4　清子の姑に対する思いについて答える問題

傍線部で清子は、「そうした姑」のことを見て、悲しい気分になっている。では、「そうした姑」とは、姑のどんな様子を指しているのだろうか。

それについては、傍線部の直前に明記されている。姑は、明日は温泉に行くというのが楽しみでたまらず、そのことを清子に「せっついて（＝性急にせがむように）、しょっちゅう話しかける」（→b）。その様子は、まるで聞き手の清子を取り逃がしてしまうのが怖いとでもいっているようだった（→c）。そんな姑の様子を見て、清子は悲しい思いになってしまったのである（→d）。

これらのことから、正解のおおよその方向性が確定できる。正解は、**〈自分に頼ってくるかのような姑の様子を見て、清子は悲しくなった〉**といったものになるはずである（この時点で、〈姑の様子を見て悲しくなった〉というのではなく、〈自分で自分のことが悲しくなった〉という方向性になっている③と⑤は、間違いだということがわかる）。

次に、傍線部を含む部分をやや広く見渡し、清子と姑との関係について確認してみよう。**【本文解説】**の2でも確認したが、ここで注目してほしいのは75行目である。「いわば二人はお互の突っかい棒になっていた。年老いているだけに姑はよけいこの支えなしでは居られない」。つまり姑は普段から清子に頼り切っていたのであり、清子のほうもそうした姑を「突っかい棒（＝支えるための棒）」にしている。**二人は、けっして離ればなれになることのできない存在**なのだ（→a）。しかも清子は、そうしたことを充分に自覚していると考えられる。それは、清子が再婚もせず、これから先もずっと姑を守って暮らしていこうと決意している（82～83行目）ことからも明らかだ。

以上の内容をまとめてみると、次のようになる。

> **a**　とくに良人が亡くなってから、清子のなかには、自分と姑はけっして離れられない存在なのだという思いがあった。
>
> **b**　そんな姑が、温泉に行くのが楽しみでたまらないということを何度もせがむように話しかけてくる。
>
> **c**　その様子は、まるで清子を取り逃がしてしまうのが怖いとでもいっているようだった。
>
> **d**　そんな姑の様子を見て、清子は何か悲しい気持ちになってしまった。

以上のa～dを過不足なく説明しているのは②であり、これが正解である。「道中の楽しみのことをいつになく執拗（しつよう）なまでに話しかけてくる姑の口ぶりに接して」がbに、「自分と姑との抜き差しならぬ間柄といったことにあらためて思いを馳（は）せる」がaに、「自分にすがって生きていこうとしているかのような姑のありよう」がcに、そして「何とも言いようのない切なさを覚えている」がdに、それぞれ対応している。

なお、aを言い換えた「自分と姑との抜き差しならぬ間柄といったことにあらためて思いを馳せる」という部分がよくわからなかったという人もいるかもしれないが、「抜き差しならぬ」というのは〈抜くことも差すこともできない〉つまり〈身動きがとれない〉という意味である。したがって、これは二人の離れようとしても離れられない関係のことを言い換えたものだということになる。「あらためて思いを馳せる」というのは、清子が傍線部の直後で「良人が亡くなってから」の姑の様子をしみじみと思い返していることを考えれば、とくに間違いとはいえないと判断できるはずだ。

①は、aとcにまったく触れていない点で、説明不足な選択肢だといえる。また、「年寄りに特有の性急さ」というのもおかしい。たしかに姑の話しぶりは「性急」だが、それが「年寄りに特有の」ものだといったことは、本文には述べられていない。

③は、先にも述べたとおり、「自分の身の上のことを考えてしみじみと悲しい気分になっている」というのがdから大きく外れている。清子は姑の様子を見て悲しくなったのであり、この先ずっと姑の面倒を見なければならない自分のことが、自分で悲しくなったのではない。

④は、温泉に行けるということが姑にとって「些細なこと」なのかどうかもわからないし、なにより、喜んでいる姑の姿を見て、清子が「どこか納得しがたい気持ちになって」いるというのが、本文から読みとれない。また、「やりきれない（＝これ以上やっていけない、たえられない）気分」になっているというのも、傍線部の「悲しかった」に対応していない。

⑤は、③と同様、dから外れている。しかも、清子が「自分の境遇をみじめなものと感じて」いるかどうかも、本文から読みとれない内容である。

問5　傍線部の場面における清子の心情について答える問題

傍線部で清子は「見えない良人」に話しかけているが、これと同じような場面が、87～90行目にもある。そこで、これらの二つの場面を視野に入れ、清子の心情について考えてみよう。

まず最初に確認したいのは、傍線部に「良人を詰った（＝責める、問い詰める）」とあり、その直後に「肚立たしい」ともあるが、にもかかわらず清子が本気で良人に対して怒りを覚えたりしているわけではないという点である。**【本文解説】**1の後半でも確認したとおり、清子と良人はきわめて仲のよい夫婦だったのであり、清子は良人を「尊敬」してさえいたのだ（59行目）。

では、なぜ清子は良人のことを「詰った」のか。それはやはり、良人が自分を遺して他界してしまったからだろう（→d）。良人がいなくなったことによって、清子は、姑と二人きりで支えあって生きていくことを余儀なくされることになった。もちろん清子はそうした生き方を受け容れてはいるのだが、そこには言いようのない悲しさや寂しさのようなものがあるはずだ。しかも清子には、そうした晴らしようのない気持ちをぶつける相手もいない。だから彼女は、「見えない良人」にそうしたやりきれない気持ちをぶつけるしかなかったのである（→f）。

次に注意してほしいのは、85行目の「この家も今夜一と晩の名残りかと思うと」という表現や、89行目の「もう、お別れよ、お別れよ」というせりふである。こうした箇所からは、清子が、良人と別れることの辛さ、寂しさをあらためてかみしめているのだろうということがわかる（→e）。しかも、その良人には美食にまつわる独特の才能のようなものがあり、清子はそうした良人に「神秘めいたもの」を感じて、彼を「尊敬していた」（→c）。これらの内容もしっかり確認しておきたい。

そしてもうひとつ、傍線部直後の内容も見逃してはならない。清子は見えない良人のことを詰りながらも、「不思議に良人の文章から御馳走が脱け出して次ぎつぎと眼前に並び、今にも手を出したい衝動に、清子はつばが出てきて仕方がなかった」。つまり清子は、良人の文章によって食欲を刺激されているのである（→a）。さらに、清子は亡き良人があたかも眼の前に実在するかのように感じており、その良人の俤に向かって話しかけている（→b）。こうしたことも確認しておこう。

以上の内容をあらためて整理してみると、次のようになる。

a　清子は、良人の書いた文章を読んで、御馳走が眼前に並んでいるように感じ、食欲を刺激されたような気分になった。

b　清子は、亡き良人があたかも眼の前に実在しているかのように感じている。

c　その良人には、美食をめぐって独特な才能があり、そのことを清子も尊敬していた。

d　そのような良人が、自分を遺して他界してしまった。

e　清子は、良人がいなくなったという思いをあらためてかみしめている。

f　こうしたやりきれない気持ちを、清子は「見えない良人」にぶつけるしかなかった。

以上のa～fに最も即した選択肢は⑤であり、これが正解である。選択肢中の「余人の及ばない」というのは、cにおける良人の才能の独特さを説明した表現だと考えればよいだろう。

①は、「生前の良人が自分に向けてくれていた愛情も本当の愛情ではなかったのではないかと思えてしまい」が、本文にまったく述べられていない内容である。

②は、良人の文章に食欲を刺激されてしまった自分に「浅ましさを感じ」たというのが、本文から読みとれない。また、「嘘の御馳走を本物のように感じる自分が良人に抱いていた愛情など真実のものではなかったように思えて」というのも、本文からまったく読みとれない内容である。

③は、「かねてから自分のなかにあった良人の美食趣味に対するわだかまり」が間違い。清子は、良人が生きていた頃から、彼のことを「尊敬していた」のである（59行目）。また、良人が「好き勝手なことばかりしながら生きていた」のかどうかも、本文から確定できない内容である。

④はやや紛らわしいが、「嘘」の中身が間違っている。この選択肢では、「質素な食事ばかりを好んでいたにもかかわらず、贅沢な食事を好んでいるかのように書いていた」ことが良人の嘘だとされているが、そうではない。良人の嘘は、食べてもいないものを本当に食べていたかのように書いていた点にあったのである。

問6　本文中の表現とその効果について答える問題

一つ一つの選択肢について、本文の該当箇所と照応させながら検討していこう。

①だが、たしかに料理を描写した部分には、こうした言葉が使われている。「グツグツ」は鍋の粥が

煮えるときの音を表した言葉だから「擬音語」だといえる。また「コリコリ」は鮑の歯ごたえある様子を表した言葉で、「ビチビチ」は白魚の動く様子を表した言葉だから、この二つの言葉は擬態語だといえる（なおこの二つの言葉については、鮑を噛んだときの音や白魚の跳ねる音を表したものだと考え、擬音語とみなすこともできる）。そしてこれらの表現によって、料理の描写は生々しくリアルなものになっていると考えることができる。したがって、この①は正解である。

②については、まず**【本文解説】**の「**まとめ**」の後半部分を参照してほしい。本文の大部分は、清子の視点に即して描かれている。しかし、役所での食事の場面には清子がいないのだから、ここでは清子が直接は知ることができないはずのことが描かれているということになる。これは、良人の様子が、清子の視点とそうでない視点から描かれているということだから、それを「良人の人物像が多角的なかたちであきらかにされている」といっても間違いではない。したがって、この②も正解である。

③は、「覚束ない調子で語っている良人」が間違い。「覚束ない」とは（はっきりしない、頼りない）といった意味だが、牡蠣や鮑の旨さを語っている良人の口調はかなり流暢であり、夢中になって喋っているようである。実際、「良人の口調には知らずしらずに国訛りがまじる」（41行目）とか「良人の話はだんだん熱をおびてくる」（47行目）とかいった描写はあるが、その口調が頼りないものだということは、本文のどこにも書かれていない。

④は、「自分の想像の真偽を人に確かめずにはいられない良人の慎重な性格」が、本文からまったく読みとれない内容である。良人は、たとえば電車のなかで一人で美食のことを想像して満足してしまうような人間なのだから、そんな彼が「自分の想像の真偽を人に確かめずにはいられない」人物だと考えるのは無理がある。

⑤は、まず「冷淡なところのある清子」がおかしい。良人が粥を気に入ればそれを毎朝炊き、良人の弁当をあれこれ工夫し、さらに夫の死後も義理の母親の面倒を見ようとしている清子のことを、「冷淡」だと評することはできないはずだ。また、そもそも、使っている言葉が方言かどうかで人柄の違いがうかがえるといったこと自体が、まったく根拠のない内容だといえるだろう。

⑥も、やはりまったく根拠のない内容である。別れを受け容れるか否かということと、料理に興味があるかどうかということの間に、何か関係があるわけではない。そもそも清子はあれこれと工夫して粥をこしらえているのだから、「料理にはさほど興味のない清子」というのは明らかな問違いである。

第3問　古文

【出典】

『松蔭日記』巻十四・「玉かしは」

成立　江戸時代前期（一七一〇～一七一四頃）

ジャンル　日記

作者　正親町町子（一六七六～一七二四）。京の公家正親町権大納言実豊の娘で、十六歳で京から江戸に下り、柳沢吉保の側室となった。

内容　全三十巻。『松蔭の日記』とも言う。また、第一巻の巻名から、『むさし野の記』とも称される。

作者の主人である柳沢吉保は、徳川五代将軍綱吉の側近として、上野国館林藩士から将軍の側用人（＝綱吉が設けた役職で、将軍の命を老中に伝達し、また老中の上申を将軍に取り次ぐ役職）に取り立てられて絶大な権力を振るい、ついには老中格の扱いを受けて、甲府城主として十五万石を超える大名になった人物である。

この『松蔭日記』は、作者が、第一巻で「いでや、その御さかえの事を、……おのづから見たまへ集むるままに、かたはし、つづしりをくなりけり（＝いやもう、その吉保様の御栄華の様子を、……おのずからあれこれ拝見するのにしたがって、その一端を、書きとどめるのであった）」と述べているように、その吉保の一代の栄華の記録である。この作品を書いたのは町子であるが、柳沢家の資料が参照されたり、また吉保自身の言葉なども記されていたりすることから、その執筆には、自らの栄華の日々を私的に残そうとした吉保の意向も働いていると考えられている。

吉保が二十八歳で出羽守となったところから書き起こされ、綱吉の死後、吉保が多くの妻妾を伴い、別邸の六義園に隠居して晩年を過ごすまでの、約二十五年間に及ぶ事績が、京の公家出身で、文学や和歌の教養が深かった町子ならではの優雅な和文で綴られている。吉保自身も学芸を好み、特に和歌に堪能で、歌人の北村季吟に学んだ。政務の合間にも和歌の精進を怠らず、作者の兄である正親町公通を通じて、当時の歌の名手であった霊元上皇に添削を受けることもあった。

この『松蔭日記』には、「たびごろも」「春の池」など、三十巻のそれぞれに章題がつけられているが、そのいくつかに吉保の詠歌の一部が用いられている。また、書名の「松」は、元禄十四年（一七〇一）に「松平」の姓を将軍より下賜された吉保のことで、「松陰」とは、作者がその吉保の庇護を受けているという意であると考えられる。

なお、今回の本文は、岩波文庫の『松蔭日記』に拠るが、出題にあたり、途中一部省略したり、表記を改めたりした箇所がある。

【本文解説】

【出典】で述べたように、この日記は、作者である町子自身の日常を綴るものではなく、吉保の栄華の記録であるため、吉保の言動を中心に記述されており、今回の本文もそのようになっている。

元禄十五年（一七〇二）の四月六日、神田橋にあった吉保邸が焼失した。巻十三「山さくら戸」に「暁方、下の屋より火出で来て、ほどなく広ごりつつ、常おはする所は、さるものにて、所々、造り続けたる屋ども、残りなく焼けにけり」と描かれているように、家屋は全焼し、将軍綱吉から下賜された、藤原定家の筆による『伊勢物語』などの貴重な文献も焼けてしまった。一家は各地に分散して仮住まいをし、邸の再建を待った。再建は大変な早さで進み、火事からわずか一箇月後の五月上旬に新居は完成した。今回の本文は、再建された邸に、一家が引っ越してくる様子を描く場面である。

五月の初めにまず吉保の居室が完成し、霊雲寺の覚彦比丘が、新宅の安全を祈る儀式を執り行った。「比丘」とは僧侶のことを言う。その後、順次、正室や側室、その子たちの暮らす所も完成して、次々にそれらの人々が移ってきた。この邸には、むろん作者である町子の居室もあって、作者はその様子を描いているが、あくまで簡略な表現にとどまっており、また自身が詠んだ歌のことも記していない。そういったところにも、この日記が、あくまでも吉保を中心としたものであることがうかがわれる。

毘沙門天像についての記述も、吉保の信仰心の深さを物語る逸話となっている。旧邸の持仏堂に安置されており、火災で焼けたと思っていた毘沙門天像が、不思議な縁で戻って来たという話だが、それが、かつての持仏堂にあった毘沙門天像そのものなのか、それともかつての毘沙門天像に瓜二つの別の像であったのか、この本文からだけでは判然とはしない。「もとの持仏堂は、みな焼けぬるほどに、うつし奉るひまだになくて」という記述があることから、もとの毘沙門天像は焼けてしまったが、驚くほどそっくりな毘沙門天像が吉保の前に現れたのだとも考えられるし、再び手に入れた像について、作者が「ただそれなり」「なほ

疑ふべくもあらねば」と記していることからは、もともとの像が誰かの手によって持仏堂から持ち出され、めぐりめぐって吉保のもとに戻ったとも考えられる。そのいずれであるにせよ、この逸話は、作者の個人的な経験や驚きを語るというよりは、吉保と仏との縁の深さを読み手に示すものとなっている。

こうして、新邸ではみなが新たな暮らしをはじめ、かつての名残も消え去ったと結ぶところで本文は終わる。

【全文解釈】

五月の始めころ、まず（吉保様）ご自身がお住まいになる所が、完成した。霊雲寺の覚彦比丘がいらっしゃって、安鎮の法などを執り行いなさる様子は、たいそう頼もしい。お住まいのつくりは、日常の居間から始まって、御休息の間、納戸、何々の間、これこれの廂の間と、次々に理想的に建て連ねている。もとのお住まいは、長年、やむをえない事情によって、臨時に増築などして、あちらこちら不満なことばかり（がある状態）で過ごし続けていたので、「さあ、今度こそ」ということで、あれこれと風情があるように（邸の造作を）計画なさる。そうはいうものの、（吉保様は）自慢げにするのはお好きでないご性格であって、ただ同じ様子の一部屋一部屋もそれなりに風情があって当世風である様子が、かえって感じがよく理想的に（思われる）。その月の九日という日に、（吉保様は新居に）お移りになった。将軍様からもいろいろと御贈り物がある。こちら（＝吉保様）からも、献上する物などが、いつものように次々と続いている。あちらこちらからのお祝いも、また盛大である。長男の君から、

新しく完成したお邸にいつまでも飽きることなく住むはずの今日から、なるほどほんとうに栄えていくだろうと思ったことですよ。長い将来に至るまで。

将軍様の（吉保邸に滞在なさる時の）御殿も、新しくお造りになろうというご準備があるので、そのために必要な材木などは、みな（将軍様から）いただきなさる。平岡資因といった家司が、今回のお邸のこと（＝新築の指揮）をお引き受けして、とりわけはやく造り申し上げたことを、将軍様も聞きつけなさって、感心して下賜なさる旨（のお言葉）があって、（平岡は）葵の紋入りのご褒美をいただいた。本当に前例のないことだなあと、人々はうらやむ。

こうして御正室の定子様、若君、姫君をはじめとして、他の奥様方の住まいが日がたつにつれて完成しては、先を争うようにお移りになる。お部屋のつくりも、それぞれにご希望の趣向を（そのまま）指図してお造りになった。あちらこちらに、（人々の）お住まいは行き来できるように通じていて、とうてい尽きることもない（興趣深い）ご様子は、はなはだすばらしい。初めて（ご一家の）方々が祝宴を催した折に、吉保様が、

新しい邸で皆が集っての祝賀の宴では、今日から先、時がめぐってもずっと長い年月にわたって栄えるようにと祝って、盃もめぐることだ。

私自身などが伺候する所も、東側は、四男の君がいらっしゃる（ところに続く）門を広く開けて、風格のある感じだ。建物の内部は、造り連ねて、庭から吉保様のお住まいの方に（続くところには）、隔てが一枚あって、（吉保様のところへ）参上することになる時は、中の戸口を開けて行き来するように、たいそう風流な様子にお造りになっている。お歌など献上したけれど、よく覚えていないので書かない。

そうそう、持仏堂に安置なさった毘沙門天像は、またとなく、すばらしいご尊体で、霊験あらたかなことがおありになった。同じ格好の像を、後ろ向きに合わせて立たせなさっていた。以前から、（吉保様は毘沙門天を）尊び申し上げなさるが、いつの時であっただろうか、すばらしい（毘沙門天の）像を手に入れなさって、長年拝みなさっていたのだが、先日の（火事の）騒ぎで、もとの持仏堂は、みな焼けてしまった時に、移し申し上げる時間さえなくて、（毘沙門天像は）どのようになったのだろう、たいそうつらいことだと（吉保様は）嘆きなさったが、そのころ、覚彦比丘のところへ、ある修行者が、今の像を持ってきて献上したところ、この吉保様がお持ちになっていたものにたいそうよく似ていたので、（覚彦比丘が）「不思議なことで、（何か）わけが（あるのだろう）」と思って（手元に）とどめた。そして（覚彦）比丘が、「こうこうでございました」と申し上げなさったところ、（吉保様は）「それをなんとかして（私に）ください」とおっしゃって、とうとう頼んで手に入れなさった。そして安置し申し上げて、拝み申し上げなさるが、まったく（以前の像と）違うところがなく、ただもうそれである。「不思議だ。どうして猛火の中を逃れて、他の所へお移りになったのだろうか」などと、人も言うが、やはり疑いようもないので、ますます畏れ多くも、驚くことでもあり、めったにないことであった。長年真実の信仰心が行き届いて、仏とご縁を深く結びなさっていたので、末法の世であるが、やはり神仏の（衆生を救うという）お誓いはやぶられなかったことが、頼もしいことであった。

こうしてお邸には、あちらこちら、（ご一家が）趣

ある様子でお住まいになって、今はかつての名残もない。

【設問解説】

問1　短語句の解釈問題　**問題**

センター試験の古文の問1では、短語句の解釈が三つ出題される形式が定着している。古語の意味や文法を押さえるだけでなく、文脈判断も必要とされる。

(ア)「さる方にをかしう今めきたる」

「さる／方／に／をかしう／今めき／たる」と単語に分けられる。ポイントとなる語句は「さる方に」「をかしう」「今めき」である。

さる方に（連語）
［連体詞「さる」＋名詞「方」＋格助詞「に」］
そのような方面に。それ相応に。それはそれとして。それなりに。

をかし（シク活用形容詞）
1　趣がある。風情がある。
2　すばらしい。すぐれている。
3　かわいらしい。愛らしい。
4　おもしろい。興味がひかれる。
5　滑稽だ。おかしい。

今めく（カ行四段活用動詞）
現代風である。当世風である。

「さる方に」は慣用句で、前記のような意味をもち、①「それなりに」、③「それ相応に」が該当する。「をかし」は多義語で文脈による判断が必要となるが、前記の意味に該当するのは、①「風情があって」、④「すばらしく」である。「今めく」は、①「当世風である」、④「現代的である」が該当するが、目新しく華やかな感じを表す語であるので、②「目新しい感じである」、⑤「華やかな雰囲気である」も間違いとは言いきれない。以上のように語の意味を押さえていくと、すべての意味を正しくとらえているのは①で、これが正解である。

文脈を確認すると、ここは吉保の住まいの「ただ同じさまの隔て隔て（＝ただ同じ様子の一部屋一部屋）」について述べる箇所である。吉保の「ほこりかなる方は好ませ給はぬ御本性（＝自慢げにするのはお好きでないご性格）」によって、どこの部屋も同じような造りになっているのだが、一見すると目を引く特徴がないようなその有様を、「なかなかめやすくあらまほしうなん（＝かえって感じがよく理想的に思われる）」というのは、作者がそれを「さる方にをかしう今めきたる様」だと感じているためである。選択肢のいずれも、文脈にあてはめてみるとそれなりに意味が通じるように感じられるため、ここでは基本の単語力があるかどうかが解答の決め手となる。いずれも重要な語句なので、しっかりと覚えておこう。

(イ)「ゆゑゆゑしうてあり」

「ゆゑゆゑしう／て／あり」と単語に分けられる。「ゆゑゆゑしう」がポイントである。

ゆゑゆゑし（シク活用形容詞）
由緒ありげだ。風格がある。格調が高い。重々しい。

「ゆゑゆゑし」は、「理由。風情。由緒。縁故。さしつかえ」などの意を持つ名詞「故（ゆゑ）」を重ねたもので、いかにも由緒のありそうな、風格ある様をいう。語の意味がわかれば正解は④だとすぐに決まる。

ここは、「東面は、四郎君のおはする門ひらけわたして（＝東側は、四男の君がいらっしゃるところに続く門を広く開けて）、ゆゑゆゑしうてあり」という文脈で、作者が、自らの新しい居室の東側がどのような様子であるかを述べる部分である。

(ウ)「あらたなる事おはしましけり」

「あらたなる／事／おはしまし／けり」と単語に分けられる。ポイントとなる語は「あらたなる」「おはしまし」である。

あらたなり（ナリ活用形容動詞）
1　新しい。改まる様子だ。
2　はっきりしている。
3　神仏の霊験が著しい。

おはします（サ行四段活用動詞）
1　いらっしゃる。おありになる。　…尊敬の本動詞
2　お～になる。～ていらっしゃる。～なさる。　…尊敬の補助動詞

まず「おはしまし」は尊敬語なので、丁寧語として訳している、④「ございまし」、⑤「ありまし」は不適切であるとわかる。また、ここで「おはします」は「事」という名詞の直下にあるので、前記1の本動詞の用法である。すると、②「まったく新しいものになりなさった」は、「まったく」「なり」が傍線部に根拠のない表現である上に、「おはします」を補助動詞として訳している点でも間違いだと言える。その上で「おはしまし」を尊敬の本動詞として

正しく訳している、①「すばらしいことがありなさった」、③「霊験あらたかなことがおありになった」を見てみると、①の「すばらしい」は「あらたなる」の意味に該当しないので、正解は③と決まる。

傍線部が毘沙門天像と吉保の縁の深さについて語る文脈の中にあることからも、「霊験あらたかな」という訳語はふさわしいと言えよう。

センター試験の古文では、敬語は、**問2**で出題されることもあるが、このように**問1**などの解釈問題に含まれることもあるので、しっかり学習しておかなくてはならない。

問2　文法問題

センター試験の古文の**問2**では、文法問題が出題されることがほとんどである。語の識別が中心であるが、敬語に関する問いが出題されることもある。確実に得点できるようしっかりと基本を身につけておこう。

今回は「し」の識別を問うた。「し」の識別は'00年の本試験と'10年の追試験で出題されている。

「し」の識別

1　過去の助動詞「き」の連体形。
　→活用語の連用形に接続する。「～た」と訳せる。
2　サ行変格活用動詞「す」の連用形。
　→「する」の意味になる。
3　サ行四段活用動詞の連用形活用語尾。
　→右記2と違って「する」という意味ではなく、これだけでは一単語とならない。
4　形容詞の一部。
　→活用語尾、もしくは活用語尾の一部。
5　強意の副助詞
　→本文から「し」を取り去っても文意が変わらない。
　「～しも」「～しぞ」などの形が多い。

a　造り加へなどして

直上に、副助詞「など」があるので、「し」は一語であり、直下には接続助詞「て」があるので、連用形であるとわかる。訳してみると「増築などして」と、「する」の意味になることから、前記2のサ行変格活用動詞の連用形であると判断できる。これによって、選択肢は①、③、④にしぼられる。

b　またいかめし

直上の「いかめ」は一語として説明ができないことから、「いかめし」で一語だととらえるとよい。文末であるため、「いかめし」は終止形で、「し」は前記4の形容詞（シク活用）「いかめし」の終止形活用語尾である。これによって、選択肢は①、③にしぼられる。

c　門ひらけわたして

直下に接続助詞の「て」があるので、「し」は連用形であるとわかるが、直上の「ひらけわたし」だけを一語として説明することはできないので、「ひらけわたし」で一語であり、前記3のサ行四段活用動詞の連用形活用語尾だと考えられる。「門」に続いており、「開け渡し」と漢字表記できる複合動詞である。

d　もたせ給ひしに

直上に、ハ行四段活用動詞「給ふ」の連用形「給ひ」があるため、この「し」は、連用形に接続する前記1の過去の助動詞「き」の連体形であるとわかる。直下の「に」は格助詞である。格助詞は名詞や連体形に続くので、その点でも、この「し」が過去の助動詞の連体形であると考えるとつじつまが合う。

以上の検討から、正解は③である。

問3　人物と思考の内容の説明問題

センター試験の古文の**問3**以降では、例年、説明問題が出される。解答するためには、本来ならば、まずは傍線部の内容確認をしなくてはならないが、「いで」は感動詞で、「さあ。いざ。いやもう。いや。これこれ」などの複数の意を持つため、とりあえずそこは保留にして、「誰が」思ったのかという人物から特定していこう。

傍線部の直下を見てみると、「さまざまと故ありて思しかまへ給ふ」とある。「思しかまへ給ふ」は、「思しかまへ」も「給ふ」も尊敬語であることから、「いで、この度こそ」と「思しかまへ」た人物は、作者自身ではなく、吉保であると考えられる。

また、「思しかまふ」は「思ひかまふ」の尊敬語だが、「思ひかまふ」は「考え企てる。計画する」の意である。そこで、吉保がどのように「思しかまへ」たのか、ここに至る流れを確認してみよう。

傍線部の直前には「もとの御住まひは、年月、えさらぬ事につけて、臨時に造り加へなどして、こなたかなたあかぬ事のみありわたりけるを」とある。この部分においてポイントとなる語は「えさらぬ」「あかぬ」である。

えさらず（連語）
［副詞「え」＋ラ行四段活用動詞「避る」の未然形＋打消の助動詞「ず」］

避けることができない。やむをえない。のがれられない。

あかず（連語）
［カ行四段活用動詞「飽く」の未然形＋打消の助動詞「ず」］
1　心残りだ。物足りない。不満足だ。
2　いつまでも飽きない。いやにならない。

これらの表現を踏まえて直訳してみると、「もとのお住まいは、長年、やむをえない事情につけて、臨時に増築などして、あちらこちら不満足なことばかりであり続けていたので」となる。どのような事情があったかは詳しく述べられていないが、吉保の旧邸は、必要に迫られて増築することがあり、その結果、吉保はあちこちに不満を持っていたことがわかる。

それに続いて「いで、この度こそ」と、吉保が「さまざまと故ありて思しかまへ給ふ」とあるのだから、さきほど保留にした「いで」は、思い立って行動しようとする気持ちを表す「さあ。いざ」の意がふさわしい。さらに、「この度こそ」の後に省略された内容は、「自分が満足できる状態にしあげよう」というものであると考えられ、「故」は「風情。趣」（**問1**(イ)の解説参照）の意であると考えられる。作者は、本文2行目に、吉保の新しい居室の様子を「つぎつぎあらまほしう建てわたしたり」と表現しているが、その「あらまほしう（＝理想的に）」というのは、まさに吉保が、「いで、この度こそ」と「思しかまへ」た理想の通りだという意味である。吉保は、旧邸に対して持っていた不満を解消すべく、「さあ、今度こそ自分の理想通りの満足できる邸にしよう」と、風情があるように家を設計し、その通りに造っていったのであり、その内容を踏まえている⑤が正解となる。

①と②は「思った」主体が作者になっていることが誤り。そのため、思った内容も本文とはまるで合わないものになってしまっている。

③は、まず「気まぐれに」という部分が誤り。増築はあくまで「えさらぬ」事情でなされたものであり、思いつきによるものではない。「使い勝手が悪い」というのは、「あかぬ事のみありわたりける」を具体化したものとは言えるかもしれないが、「住みやすい間取りにしよう」は「故ありて」の説明として不適切である。

④は、「やむを得ない増築」という部分は良いが、そのことによって「妻や子どもたちの居室に不公平が生じていたので」「同じ間取りで、誰もが納得するようにしようと思った」というのが誤り。「不公平が生じていた」とは本文のどこにも書かれていないし、新邸でどこも「間取り」を同じものにしたとも書かれていない。

問4　経緯の説明問題

「請ひ受け給へり」に至る経緯の説明だが、選択肢はどれも、吉保が毘沙門天像を手に入れるまでの経緯を説明したものになっている。「つひに請ひ受け給へり」という傍線部の意味を考えると、複合動詞「請ひ受く」の「請ふ」は「人に物を求める。頼む。神仏に祈る」などの意を持ち、全体を直訳すると、「とうとう（誰かに何かを）頼んで手に入れなさった」となる。次に、傍線部を含む一文を見てみると、「さて比丘、『しかじかなん侍りつ』と申し給へれば、『それいかで得させ給へ』とのたまひて、つひに請ひ受け給へり」とある。「つひに請ひ受け給へり」という行為は、覚彦比丘の発言に応じたものであり、また「給へ」という尊敬の補助動詞が用いられていることからも、その主体は吉保であるとわかる。すなわち、傍線部は、吉保が、覚彦比丘に対し、「それいかで得させ給へ（＝それをなんとかして私にください）」と言って、毘沙門天像を「頼んで手に入れた」という内容になり、それを踏まえているのは、④の「その話を聞いた吉保が、覚彦比丘に頼み込んで手に入れた」というものだけで、これが正解である。

さらに、それに至るまでの経緯についても、第五段落の内容から確認してみよう。吉保が長年拝んでいた毘沙門天像は、火災で持仏堂が「みな焼けぬる」時に、「うつし奉るひまだになくて（＝移し申し上げる時間さえなくて）」、そのため吉保は「いかがなりけん、いと心憂きこと（＝どのようになったのだろう、たいそうつらいことだ）」と嘆いていた。その頃、覚彦比丘のところに、ある修行者が、「今の像」、すなわち新居に安置されることになった毘沙門天像を持って来て献上した。それが、「この君のもたせ給ひしにいとよく似たりければ（＝この吉保様がお持ちになっていたものにたいそうよく似ていたので）」、覚彦比丘は「あやしう、あるやうこそ（＝不思議なことで、何かわけがあるのだろう）」と思い、手元にとどめた。そして覚彦比丘は、「しかじかなん侍りつ（＝こうこうでございました）」と吉保に語る。「しかじか」の内容は、その流れからいけば、「ある修行者が、かつての持仏堂にあった像とよく似た像をもってきた」ことに相違なく、毘

沙門天像が失われたことを嘆いていた吉保は、その話を聞いて、覚彦比丘に「それいかで得させ給へ」と言い、毘沙門天像を「請ひ受け」たのである。選択肢④は、「持仏堂の毘沙門天像は、火災の時に燃えてしまったと思われた」という部分も、「ある修行者によってそれによく似た像が覚彦比丘のもとに持ち込まれ」という部分も、本文の内容に即しており、やはり正解で間違いない。

①は、「毘沙門天像は焼け残っていると信じてずっと探し続け、ついに、覚彦比丘のもとにあることを突き止めて取り戻した」が誤り。吉保は像について「いかがなりけん」と嘆いていただけで、その無事を信じ、積極的に探して取り戻したわけではない。

②は、「実はある修行者が覚彦比丘の指図によって持ち出した」が明らかに間違っている。仮に「ある修行者」が火事の中、持仏堂から持ち出したと考えても、それが覚彦比丘の指図であるならば、像を持ち込まれた比丘が「あやしう、あるやうこそ」などと思うはずはない。

③は、「覚彦比丘が、吉保の大切にしていた毘沙門天像が火災で失われたことを気の毒に思っていた」という部分が、そのような心情は本文には描かれていないため間違っている。また、「それを譲ってくれるように懇願して手に入れ、吉保に贈った」という説明では、「請ひ受け」た主体が覚彦比丘だということになり、そこも大きく間違っている。

⑤は、全体が誤り。吉保が「体調を崩した」や「覚彦比丘が吉保の快癒を祈っていた」などということは本文のどこにも記述がなく、またこの選択肢は「請ひ受く」の意味についてもまったく押さえられていない。

問5　和歌の説明問題

センター試験の古文において、和歌の設問は頻出である。和歌の詠み手や趣旨、内容、解釈などに加えて、修辞法などの表現技法が問われる場合もある。和歌を特別なものだとして苦手意識を持つ人は多いだろうが、読解の基本は、文法や単語に留意しつつ逐語訳していくことであり、その点では散文とさほど変わりはない。しかし、逐語訳しても意味が通じない場合もあり、そういった時には、前後の文脈から、その和歌が誰によってどのような状況下で詠まれたのかも十分に確認して、和歌の読解にあたる必要がある。また、修辞法（枕詞・序詞・掛詞・縁語）にも注意しなくてはならない。さらに、歌全体が比喩になっていることもあるので、それにも注意しなければならない。和歌は、確かに一筋縄ではいかないものだが、古文の学習では、避けられないものと心得て、しっかりと励んでほしい。

今回は、詠み手について、**A**は「太郎君」、**B**は「君（＝吉保）」と本文中に明示されているので、その内容のみを問うている。

Aは、「殿造り／あかず住むべき／今日よりぞ／むべもと見ける／千代の行く末」と句に分けられ、第四句の「ける」が第三句の係助詞「ぞ」を受けて、係り結びが成立しているので、四句切れである。詠み手は「太郎君」、すなわち吉保の長男であるが、歌の直前には、新居に移った吉保のもとに、将軍をはじめとして、あちこちからお祝いが届けられたことが描かれているのだから、この歌も息子から父へと贈られた祝いの歌であると考えられる。「殿造り」は御殿を造ること、もしくは造った御殿をさす名詞。「あかず」は**問3**で検討した連語であるが、祝いの歌であるのだから、「いつまでも飽きない」の意でとらえるとよい。「むべも」は副詞の「むべ」に係助詞「も」が接続したもので、「ほんとうに」なるほど。当然」などの意。「見る」は、ここでは格助詞「と」を受け、「思う」の意と考えられる。「千代」は「千年」の意であり、非常に長い年月のことを言う。逐語訳してみると「新しく完成したお邸にいつまでも飽きることなく住むはずの今日から、ほんとうにと思ったことですよ。長い将来」となる。わかりにくいのは「ほんとうにと思った」の部分である。「ほんとうに」と「と思った」の間に、ほんとうにどうだと思ったのかが具体的に記されていないので、補う必要がある。そこで、この歌がどのような状況で詠まれたものかを考える。前述のように、新居に引っ越した父に贈る息子の祝いの歌であったわけだから、そこに込められているのは、喜ばしい今日という日から長きにわたって、父をはじめとするこの一家に繁栄がもたらされることを願う心情であると考えられる。そのことを踏まえて、第三句以下は、「今日からほんとうに栄えていくだろうと思ったことですよ。長い将来に至るまで」などと補って解釈してゆくとよい。

Aに関する選択肢を確認すると、①は、「邸の新築を喜ぶ吉保の気持ちを代弁した」については、確かにそのように言えるかもしれないが、歌で詠まれているのは、長きにわたる一家の繁栄を望む心情であって、吉保が「みながずっとこの邸に住んで、家の繁栄を支えてくれることを願う」ものではない。その点で不適切である。

②は、「父である吉保の新邸の完成を祝う」も、

「この邸に満ち足りて暮らす自分たちが末永く富み栄えることを祈る心情」も歌の内容をきちんと押さえていて、これが正解である。

③は、「自邸を再建し、将軍を始めとするさまざまな人々から祝福の贈り物を受けて」の部分は、歌の直前の部分の説明としては間違いではないが、「火事という苦難を乗り越えた喜びの心情」が誤りである。もちろん人々はそういった心情をもってはいるだろうが、歌で詠まれているのは「苦難を乗り越えた喜び」の先にある「長く続く繁栄への思い」である。

ここまでの検討で、正解は決まったが、**B**の歌も確認しておこう。**B**は、「君」、すなわち作者の主人である吉保が「はじめて御かたがた円居のついでに(＝初めてご一家の方々が祝宴を催した折に)」詠んだものである。「あらたなる／宿の円居は／ことぶきも／今日より千代と／めぐるさかづき」と句に分けられ、句切れはない。形容動詞「あらたなり」は**問1**(ウ)で検討したが、ここは「あらたなる宿」なのだから、「新しい」の意。「円居」は「人がまるく並んですわる。集会。宴会」の意。「ことぶき」は「慶事を言葉で祝うこと。祝いの言葉。祝いの儀式。長寿」などの意を持つ名詞であり、「めぐる」には「盃がめぐる」意味に「時がめぐる」意味が重ねられている。全体を逐語訳すると「新しい邸での宴では、祝いの言葉も、今日から時がめぐっても長い年月にわたってとめぐる盃だ」となる。この歌も、逐語訳では、長い年月にわたってどうなのかが具体的に記されていないのでわかりにくい。そこで、それを補うために、この歌がどのような状況で詠まれたかを考えると、吉保の新居に一同が集い、祝いの宴を催している場面で詠まれたものであるから、**B**の歌は、**A**の歌同様に「新居の完成」を祝う歌であり、補うべき言葉は、**A**と同じく「栄えていく」といった内容である。この歌では、一家が新居に初めて集った祝賀の宴で、人々が、今日からずっと栄えるようにと祝いの言葉を口にし、皆に酒杯をめぐらせつつ喜ぶ心情が詠まれているのである。

Bに関する選択肢では、④は、「新築を祝ってくれる人々に感謝し」も、「その人々のおかげで無事に完成したこの邸」も、そこを「またいつでも訪れてほしいと望む心情」も、どの点も歌の内容とは異なる。

⑤は、**B**の歌が、**A**の歌への返歌ではないとしても、「**A**の歌に応じる」とは言えるかもしれないので、そこは不適切とは言えない。しかし、**B**の歌で詠まれた内容は、これからの繁栄を願う祝いの言葉であり、単に「宴を、祝福のために集まってくれた大勢の人々と心ゆくまで楽しむ心情」を詠んだものではない。

問6　文章の表現と内容に関する説明

センター試験の古文では、ここ数年、**問6**では表現と内容に関する問題が出題されている。本文の一部を引用し、それらの表現を用いることでどういった効果があるか、またどのような内容が描かれているのかということを問うものが多く、選択肢も長い。難しい問いなので、選択肢の一つ一つを慎重に吟味していかなくてはならない。

①は、「なかなかめやすくあらまはしうなん」は、「周囲の人々の感想」ではなく、作者の見解である。また、「いとためしなきことかな」は、吉保の家臣である平岡資因が将軍綱吉から恩賞を受けたことについての周囲の人々の感想であって、「吉保の新邸について」述べた感想というわけではない。よって、いずれも誤りである。さらに、「作者自身については、詠んだ歌も自室の有様もまったく描写されない」というのも誤っている。第四段落において、作者は、短いながらも自身の居室や、その周辺の様子を記し、それについて「ゆゑゆゑしうてあり」「いとをかしきさま」などと表現している。よって、それが「描写されないことで、吉保を始めとする周囲の人々の喜びが強調されるようになっている」という点も不適切であると言えよう。

②は、「『年ごろまことの心いたりて』と述べられたりすることによって、作者自身が仏を深く信仰している気持ちが読み取れるようになっている」とあるが、本文では「年ごろまことの心いたりて」は「御結縁深くおはしましけるほどに」に続いており、そこに尊敬語があることからもわかるように、吉保のことを述べる部分であって、作者自身の信仰心を表しているわけではないから、誤りである。また、覚彦比丘に尊敬語が用いられているというのは事実としては正しいが、それはあくまでも覚彦比丘を敬う気持ちの表れであり、そこから仏への信仰心にまでつなげていく説明にも無理がある。

③が正解である。「吉保邸の再建から人々の引っ越しにいたる一連の出来事が、『五月のはじめつ方』『その月九日』など時間の推移を示しつつ記されている」のは確かであるし、また「和歌が差し挟まれたり、毘沙門天像にまつわる逸話などが付け加えられたりすることで、単なる記録にとどまらない文学性豊かなものになっている」というのも正しい。和歌はそもそも心情の表れであり、ここでも吉保の息

子と吉保の、邸の再建を祝い、将来における一家の繁栄を祈る気持ちが詠み込まれている。また、失われた毘沙門天像が吉保の元へ戻るという逸話も、作者はそれを「あらたなる事」、すなわち霊験譚としてとらえ、その経緯を具体的に描き、「いよいよかしこくも、あさましうも、めづらかなり（＝ますます畏れ多くも、驚くことでもあり、めったにないことであった）」と、感嘆する気持ちもつけ加えている。ただ単に、再建した、引っ越した、といった事実だけではなく、そういった歌や逸話をも挿入することで、叙情性のある文学的な内容となっていると言える。

④は、「『つぎつぎあらまほしう建てわたしたり』と、贅を尽くした邸の新築を記録することに主眼が置かれている」の部分の、「贅を尽くした」というのがまず不適切である。「あらまほしう」は「理想的に」の意であって、「贅を尽くした」という意味ではない。また、本文には、吉保について、「ほこりかなる方は好ませ給はぬ御本性にて」と記されており、吉保が、これ見よがしな贅沢を好まなかったことが知られるから、その点からも吉保の新邸が「贅を尽くした」ものではなかったことが推察できる。さらに、本文は、人々が新居の完成を喜ぶ様子や毘沙門天像の霊験譚にも字数が費やされており、その点でも「贅を尽くした邸の新築を記録することに主眼が置かれている」とは言えない。ただし、「『御所よりもとりどりに御贈り物あり』『葵の御禄をぞ給はりける』などと、将軍綱吉によってもたらされる恩恵を記すことで、綱吉に寵愛された吉保の栄華も浮かび上がるようになっている」の部分は、間違いとは言えない。

⑤は、「前半部では『御住まひ行きかよはして』など、新邸の落成にまつわる華やかな場面が描かれ」という部分は間違いとは言えない。「御住まひ行きかよはし」とは、吉保の妻子たちの居室が互いの新居を行き来できるように通じている様子を表し、人々が盛んに交流するありさまは、華やかであると言いうる。しかし、「後半部で『猛火のうちを逃れて』と、火災時に人々が逃げる様子が具体的に記された」の部分は誤りである。後半部にある毘沙門天像の逸話の中で、「もとの持仏堂は、みな焼けぬるほどに」とは描かれていても、この逸話は火災の後の毘沙門天像に関するものであり、火災時の具体的な描写は記されていない。「猛火のうちを逃れて」というのは、吉保が覚彦比丘から手に入れた像を人々が見て「どうして猛火の中を逃れて、他の所へお移りになったのだろうか」と不思議がる言葉の中にあるもので、人々が火災から逃げる様子を記したものではない。また、「最後は『今はありつる名残もなし』と結ぶことで、その火事も過去のこととなり安心する気持ちが描かれている」については、「安心する気持ちが描かれている」の部分が少々言い過ぎである。「ありつる名残」とは過去の名残のことだが、火事の名残を指すとも、それ以前の旧宅の名残を指すとも考えられる。本文には、完成した新居に一家が「をかしきさまに住みつき給う」ことで、その名残も消えたと書かれているだけで、「安心する気持ちが描かれている」とまでは書かれていない。

第4問　漢文

【出典】

李贄『焚書』全六巻。李贄（一五二七～一六〇二）は、明末の文人・思想家。一般には字で「李卓吾」と呼ばれている。福建省出身で、二十六歳の時に福建の郷試（官吏登用試験の地方試験）に優秀な成績で合格し、都で実施される上級試験を受験する資格を手に入れたが、上級試験は受けずに河南省で教諭に任官した。以後諸官を歴任したが、人と妥協できない性格のために絶えず上司と衝突し、五十代半ばで役人を辞め、著述と読書に明け暮れた。この引退生活の中で、中国に布教に来たイエズス会士のマテオ・リッチ Matteo Ricci（中国名、利瑪竇）とも交友関係を結んだ。また、この時期に、主要な著作である『蔵書』六十八巻、『焚書』六巻が出版された。しかし、同時代の保守的な知識人たちを罵倒する過激な言論と行動のために一般の知識人たちから異端視されて迫害・追放の憂き目に遇い、晩年には「惑世誣民」（世の中を惑わして民衆を欺く）の危険な思想家として弾劾、投獄され、獄中で自殺した。行年七十六歳。その著書、版木、草稿とも一切が焼却され、清朝になっても彼の著書は禁書目録の中に列せられた。

『焚書』とは李贄自身が名付けたもので、この書を読んだ者は怒り狂うであろうから焚き捨て去るべき書物という意味で書名としたことが「自序」に記されている。ちなみに『蔵書』とは、人に読ませるものではなく、蔵にしまい込むべき書という意味で名付けられた。本文は『焚書』巻五「読史」から採った。

【本文解説】

魏の武帝、曹操が陳琳の檄文を見て、この檄文が自分の頭痛を治してくれたと言ったというエピソードを枕として、「知己」、すなわち文字通り自分を理解してくれる人が極めて得難いものであることを述べた文章である。陳琳の檄文が魏の武帝の病気を治したというのであれば、文章が医薬品の役割を果たしたということであり、魏の武帝を奮い立たせることのできた陳琳の文章力を賞賛するという方向に向かうのが自然である。しかし、そうではなく、自らの病気が治るほどに陳琳の文章を深く理解できた魏の武帝という存在の稀少性を述べている点が、この文章の面白さである。つまり魏の武帝が深く陳琳の才能を理解し得たからこそ、その文章が薬と同じ効果を持ったのだと筆者は捉えているのである。

第三段落では、唐の玄宗と杜甫・孟浩然との、いわば非「知己」の関係を述べ、さらに六朝時代の凡庸な君主の場合はなおさら同時代の詩人や文章家たちと非「知己」の関係にあったであろうと推断している。要するに、名文章家は歴史上数多くいるが、その文章を読んで病気が治るほど深くその人物の才能を理解できる人は稀であり、魏の武帝と陳琳の関係は、その意味で極めて稀有な事例であると述べているのである。

【書き下し文】

魏武頭風を病み、方に枕に伏す時、一たび陳琳の檄を見るや、即ち躍然として起ちて曰はく、「此れ我が疾を愈せり。此れ我が疾を愈せり」と。夫れ文章にて以て病より起つべくんば、是れ天下の良薬は口より入らずして心より授るなり。病みて即ち文章を見るに起たば、是れ天下の真薬は形を以て求むべからずして、但だ神を以て領くべきのみなり。

夫れ天下の文章を善くするは、良医の薬を用ふるを善くするがごとく、古今天下に亦た少なからず。故に陳琳有るを難しとせずして、独り魏武有るを難しとするのみ。設使し陳琳の檄を凡そ目有る者の前に呈せば、未だ必ずしも皆は以て好しと為さずんばあらず、然れども未だ必ずしも遽に皆は疾を愈す能はざるなり。唯だ疾を愈し、然る後に魏武の才を愛すること最も篤く、契慕すること独り深きを見るのみなり。

故に吾陳琳の文章を能くするを喜ばずして、陳琳の知己に遇ふを喜ぶ。蓋し知己は甚だ難く、琳と雖も亦た容に知己の感を懐かざるべからず。唐の明皇、豈に是れ文章を能くする者ならずや。然るに杜甫に三大礼賦あり、浩然に「不才」の詩あるも、已に之を棄つること秦・越の人のごとし。況んや六朝の庸主をや。

【全文解釈】

魏の武帝が神経性の頭痛に悩まされていて、ちょうど枕に伏して（寝て）いたとき、陳琳の檄文を一目見るや、すぐに躍りあがるように起きあがって言った、「この文が私の病気を治した。この文が私の病気を治した」と。さて文章が病気から人を立ちあがらせることができるのであれば、この世の中の良薬というものは口から入るものではなく、心から授かるものであるということである。病気になって文章を見てすぐに起きあがるのであれば、この世の中の本当の薬というものは形を求めてはならず、もっぱら神（＝心）で受け取るものということである。

さて世の中の人が文章を上手に書けるということは、良い医者が上手に薬を使える（のと同じ）ように、昔から今に至るまでこの世の中にやはり少なからずいる。それ故に（文章の上手な）陳琳がいるということはそれほど珍しいことではないが、しかし（その

文章を見て病気が治ったという）魏の武帝がいるということはかなり珍しいことである。もし陳琳の檄文をすべての目のある人の前に差し出したならば、誰でもそれをよいと思うだろうが、しかし（それを見たからといって）誰でもすぐに病気が治るわけではない。ただ病気が治り、その後に魏の武帝が陳琳の才能をたいそう愛して、（陳琳と）深く交わり慕っていたということがわかるのである。

それ故に私は陳琳が文章が上手であるということを喜ぶのではなく、陳琳が知己に出会ったということを喜ぶのである。思うに知己はとても得がたいもので、（臣下である）陳琳であっても、（皇帝である魏の武帝に対して）知己としての思いを抱かないはずがない。唐の明皇（＝玄宗）は、すぐれた文章家であった。しかし（玄宗に献上された文章として）杜甫には三大礼賦があり、孟浩然には「不才」の詩があったにもかかわらず、（春秋時代の西北と東南の端にあって互いに遠く隔たっていて理解し合えず、無関心の間柄でいるほかなかった）秦の人と越の人（の関係）のように、玄宗は彼等を捨て去ってしまった。まして六朝時代の凡庸な君主たちなら、なおさら（同時代の文章家たちを捨て去ってしまったとしても当然のこと）である。

【重要語・基本句形】

(1) **重要語**

○方（まさニ）　ちょうどそのとき
○即（すなはチ）　ただちに・つまり
○夫（そレ）　さて・いったい・そもそも
○可（ベシ）以（もつテ）——（ス）　——できる
○是（これ）　これ・いったい・さてさて［強意の語］
○従（より）——　——から
○不（ず）レ可（ベカラ）——（ス）　——できない・——してはならない
○善（よクス）——（ヲ）　——が上手い
○如（ごとシ）——（ノ）　——（するか）のようだ
○亦（また）　また・やはり
○故（ゆゑニ）　だから
○難（かたシトス）　むずかしいと思う・困難だとみなす
○難（かたシ）　むずかしい・困難である
○設（もシ）使（セバ）——　もし（——するの）であれば
○凡（おほソ）　概して・すべて
○以（もつテ）為（なス）——（ト）　——とみなす・——とする
○然（しかレドモ）　そうではあるが・しかし
○遽（にはかニ）　すぐに
○然（しかルのちニ）後　その後
○能（トクス）——（ヲ）　——を上手にできる
○遇（あフ）　出くわす・出会う
○知己（ちき）　自分をよく理解してくれる人
○蓋（けだシ）　思うに
○雖（いへドモ）——（ス）——（ト）　——ではあるが［確定条件］・——であったとしても［仮定条件］
○然（しかルニ）　そうではあるが・しかし
○已（すでニ）　もうすでに

(2) **基本句形**

○但（ただ）——（ノミ）　ただ——だけ［限定形］
○独（ひとリ）——（ノミ）　ただ——だけ［限定形］
○未（ず）必（いまダかならズシモ）——（セ）　必ずしも——しないとは限らない・必ず——する
［再読文字・二重否定・部分否定］
○未（ず）必（いまダかならズシモ）——（セ）　必ずしも——するとは限らない
［再読文字・部分否定］
○唯（ただ）——（ノミ）　ただ——だけ［限定形］
○不（ず）レ容（まさニ）不（ざル）——（セ）　——しないわけにはいかない・——しないはずがない（容＝応）
［再読文字・二重否定］
○豈（あニ）不（ずヤ）——（ナラ）　まことに——ではないか
［詠嘆形］
○況（いはンヤ）——（ヲヤ）　哉　まして——はなおさらである
［抑揚形］

＊（セ）は活用語の未然形、（ス）は活用語の終止形、（ナラ）は形容詞・形容動詞の未然形を、それぞれ表す。

【設問解説】

問1　語の読み方の問題

問題

(1)「方」は、名詞として「方角」、「方法」などの意味で使われることが多いが、副詞として用いられるときは「まさに」（ちょうどそのとき）「はじめて」（ようやく・やっと）などの読み・意味である。①「つひに」と読む字は、「遂」「竟」「終」「卒」「畢」などである。②「かつて」と読む字には、「嘗」「曾」などがある。④「あへて」と読む字は、「敢」「肯」などである。⑤「すでに」と読む字には、「已」「既」などがある。ここでは副詞として直後の「伏レ枕ニ」を修飾しているので、「ちょうど枕に伏していた」の意味に解釈し、「まさに」と読むのが適切である。したがって、正解は③である。

(2)「蓋」には、「ふた」（名詞）、「おほふ」（動詞）

などの読みがあるが、文頭に置かれているときは「けだし」と読み、「おもうに・おそらく・たぶん」（副詞）の意味で用いられる。およその見当や推測を述べる合図の語と考えればよい。したがって、正解は⑪である。②「あげて」と読む字は、「挙」「勝」などである。③「もとより」と読む字は、「素」「固」などである。④「そもそも」と読む字は、「抑」などである。⑤「おもふに」と読む字は、「意」「思」「懐」「謂」「以」などである。

問2　心情説明の問題

傍線部を直訳すれば「これが私の病気を治した。これが私の病気を治した」となる。「これ（此）」がすぐ前の文にある「陳琳檄」（陳琳の檄文）を指していることは明白であるから、傍線部は「陳琳の檄文が私の病気を治してくれた」ということを述べているのである。一般的に文章を読んで病気が治るということがあるとすれば、その文章が何らかの刺激を与えて病人を興奮させるということであろう。そうすると、③以外の選択肢はどれも可能性がある。③「病気を治してくれるだろうと期待している」は、「私の病気を治してくれた」という言明の背景の心情としてはあり得ないので不適切である。

また、本文では檄文の内容には一切触れられていないから、内容に触れている①「細やかな心遣い」、②「意向を察知している」、⑤「檄として不適切である」は除外できる。したがって、内容に触れていない④「陳琳の文章が極めて優れていることに感嘆している」が正解となる。

ただし、檄文の内容に触れているかどうかということだけではなく、第二段落冒頭の「善二文章一」（文章を上手に書ける）、同段落中ほどの「未三必不二皆以為レ好一」（誰でもそれをよいと思うだろう）などの箇所も正解の根拠となることに注意したい。

問3　内容説明の問題

傍線部「天下之真薬」（この世の中の本当の薬）とは、魏の武帝が陳琳の文章を読んで「この檄文が私の病気を治してくれた」と述べたというエピソードを受けて、「文章を読んで病気から立ち上がることができたとすれば」という条件を前提にして述べられたものである。これを踏まえて考えると、直前の一文に挙げられている「天下之良薬」（この世の中の良薬）と同じく、薬と同様の効果を持ち得た文章を読むという行為自体を指していると考えられる。その内容は、すぐ後に続く「不レ可二以レ形求一、而但可二以レ神領一也」（形を求めてはならず、もっぱら心で受け取るものということである）に表現されている。「形」「神」を正確に解釈するのは難しいが、「形」＝「目に見える具体的なもの」、「神」＝「目に見えない精神や心に近似したもの」と想定できれば十分である。要するに、普通の「薬」ではなく、「病は気から」の「気」に作用するものであり、本文では文章を読むという行為自体を指しているのである。

以上を踏まえて選択肢を検討してみよう。①「高価な薬」、②「患者の病状に適した薬」は、いずれも具体的な薬剤であるという点で不適切である。③「病人自身の治ろうとする意欲」は、外からの働きかけを必要としていないという点でやはり不適切である。また、⑤「患者に厳しい試練を与えること」は文章を読む行為自体には当たらない。したがって、④「実際の薬そのものではなく、心に働きかけて人を癒すもの」が正解である。

問4　返り点と書き下し文の問題

返り点の付け方と書き下し文の問題は、選択肢の正誤の検討に入る前に、まずは設問箇所の文や句の構造を捉えることが肝要である。この問題では、対比的な句が連なっており、どちらの句においても「於」がキーワードになっていることに気づくべきである。前半の句の「不難」、後半の句の「難」の後に、いずれも「於」が置かれ、さらにその後に「有陳琳」、「有魏武」がそれぞれ続くという構造、つまり「○二於□一」（□に○す・□を○す・□より○す）という構造であるから、「於」は置き字として読まないのが原則である。よって、「有」から返って「於いて」と読んでいる①、「於りも」（「於」を助詞「より」として読んでいるので、選択肢の書き下し文では平仮名で記してある）と読んでいる②は、いずれも明らかな誤りとして除外できる。□の部分には「有陳琳」、「有魏武」が置かれているが、これはそれぞれ「陳琳有る」、「魏武有る」と読むしかなく、いずれの選択肢も「有陳琳」、「有魏武」の読みは同一である。したがって、考えなければならないのは「難」の扱いである。「難」は「かたし」（難しい）、「かたしとす」（難しいとみなす）、「なんず」（非難する・なじる）などの読みがあるが、この一文だけで読み方を判断することはできない。前後の文脈を捉え、意味の上から判断しなければならない。

直前の一文では「文章が上手であることはそれほど珍しいことではない」ことが述べられており、後

の一文では「陳琳の檄文は誰でもよいと思うだろうが、だからといって魏の武帝のように陳琳の文章を見て誰でもすぐに病気が治るわけではない」ことが述べられている。こうした文脈を理解できれば、傍線部は、「文章の上手な陳琳がいるのは珍しいことではないが、陳琳の文章を見て病気が治った魏の武帝がいるということは珍しい」という内容であろうことが推測できるはずである。こうした意味の方向が定まれば、③の「難ず」（非難する・なじる）という読みは、不適切であると判断できる。「難し」（難しい）、あるいは「難しとす」（難しいとみなす）という読み方が妥当するが、④「――よりも難し」のように「於」を比較の置き字として「よりも」と送るのは、意味の上で無理がある。つまり、「陳琳がいることよりも難しくないが、魏の武帝がいるよりも難しいのである」では文脈に合わない。したがって、⑤「陳琳有るを難しとせずして、独り魏武有るを難しとするのみ」が正解である。「文章の上手な陳琳がいるということはそれほど珍しいことではないが、しかしその文章を見て病気が治ったという魏の武帝がいるということはかなり珍しいことである」という解釈となり、文脈に合致する。

問5　解釈の問題

D　「未二必不一レ皆以為レ好、然未二必遽皆能一レ愈レ疾也」

かなり構造の複雑な文であり、正確な日本語に逐語訳するのは難しいが、基本句形の部分否定と二重否定が組み合わさったものであるから、句形に留意して型どおりの解釈を当てはめれば、解釈の方向性は確認できるはずである。

前半部は部分否定と二重否定が重なり合っているが、基本的には「未二必不一レ――一」という形であり、「必ずしも――しないとは限らない」→「――することも十分にある」、つまり「必ず――する」という方向の意味である（2）**基本句形**の該当項目を参照）。したがって、前半部は「必ず皆がそれをよいとみなす」という程度の意味になる。直前の句とのつながりから、「以為レ好」の「以」の後に省略されている語句を補えば「以二陳琳檄一為レ好」となり、「それ」とは「陳琳の檄文」を指していることがわかるだろう。

後半部は、「未二必――一」（必ずしも――するとは限らない）という部分否定の形である（2）**基本句形**の該当項目を参照）。「必遽皆」という副詞の連続がややうっとうしいが、基本句形に忠実に訳せば「必ずしも急に皆が病気を治すことができるとは限らない」となる。

以上を踏まえれば、②「陳琳の檄を見れば誰でもそれをよいと思うだろうが、しかしそれを見たからといって誰でもすぐに病気が治るわけではない」が正解となる。④・⑤はいずれも「以」の受けるものを「武帝の病気が治ったこと」としている点が大きな誤りである。①は「しかもそれを見れば誰でもすぐに病気が治らないはずがない」という後半部の解釈が、③は「陳琳の檄を見たとしても誰もがそれをよいとは思わないであろうし」という前半部の解釈が、それぞれ間違っている。

F　「豈不下是能二文章一者上」

「豈不二――一」（まことに――ではないか）という詠嘆形が用いられていることに注目する（2）**基本句形**の該当項目を参照）。「能二文章一者」は「文章が上手な者」＝「すぐれた文章家」という意味であり、「是」は強意・強調の語である（1）**重要語**の該当項目を参照）。直訳すると「まことにすぐれた文章家ではないか」となる。したがって、①「すぐれた文章家であった」が正解である。②は「なりたかった」が、⑤は「なるはずであった」が誤り。「能二文章一者」は状態を表現したものなので、「そうなろう」というような意味合いはない。③「ではなかった」は反対の内容であるし、④「であったとは限らない」のような部分否定としての解釈も誤りである。

問6　理由説明の問題

傍線部**E**は筆者が「私は陳琳が文章が上手であるということを喜ぶのではなく、陳琳が知己（＝自分をよく理解してくれる人）に出会ったということを喜ぶ」と述べているところであるが、どうして筆者がこのように考えたのかが問われている。まず、傍線部の内容が傍線部**C**の内容と直接関係していることに注目したい。傍線部**C**は「文章の上手な陳琳がいるということはそれほど珍しいことではないが、しかしその文章を見て病気が治ったという魏の武帝がいるということはかなり珍しいことである」と解釈でき（**【全文解釈】**および**問4**の解説を参照）、この内容がそのまま傍線部**E**の根拠となり、ここの解答となる。つまり、筆者が「陳琳が文章が上手であることを喜ぶのではない」のは、「文章が上手な人はそれほど珍しい存在ではない」からである。また「陳琳が知己に出会ったということを喜ぶ」のは、まさしく「上手な文章を読んで病気が治ったほどその文章を作った人をよく理解している魏の武帝のような知己の存在が極めて稀なものである」からに他ならない。

以上のことを踏まえて選択肢を検討すると、傍線部**E**の根拠となる傍線部**C**の内容と重なるのは⑤「すぐれた文章家は数多くいるものの、武帝に出会った陳琳のように良き理解者に恵まれる文章家はめったにいないから」だけである。①「名声が世に広まることはなかった」も、③「出世のきっかけをつかむことができた」も、④「謙虚な姿勢が武帝に評価された」も、いずれも本文にはまったく書かれていない内容である。②は「陳琳と武帝とはすぐれた文章家として認め合っていた」と説明しているが、本文には魏の武帝が陳琳のことをその文章を通して理解したことが述べられているものの、陳琳が魏の武帝の文章とその人物を理解したことについてはまったく述べられていない。よって、「陳琳と武帝とはすぐれた文章家として認め合っていた」は、本文から読み取ることのできない不適切な説明である。したがって、正解は⑤である。

問7　内容説明の問題

傍線部には抑揚形が用いられている。この句形に注意して直訳すれば、「まして六朝時代の凡庸な君主たちはなおさらである」となる（⑵ **基本句形**の該当項目を参照）。ところで、抑揚形は一般的には「A且（＝尚・猶）――。而況B乎」という形で、「Aでさえも――だ。ましてBならなおさら――である・ましてBが――であるのは当然である」という意味である。本問では「A且（＝尚・猶）――」の部分が明示されていないから、何が「A」に当たるものなのか、何が「――」に当たるものなのかを、文脈に即して判断しなければならない。

さて、傍線部の直前の内容は「唐の玄宗は、すぐれた文章家であった。しかし（玄宗に献上された文章として）杜甫には三大礼賦があり、孟浩然には『不才』の詩があったにもかかわらず、玄宗は杜甫も孟浩然も捨て去ってしまった」というものであるから、これを傍線部「況六朝之庸主哉」（まして六朝時代の凡庸な君主たちはなおさらである）につなげて解釈すれば、「B」が「六朝時代の凡庸な君主たち（「六朝之庸主」）」であることは明白であるから、「A」は「六朝時代の凡庸な君主たち」と対比関係にある「玄宗（「明皇」）」、そして「――」は「秦の人と越の人のように、玄宗は杜甫と孟浩然を捨て去ってしまった（「已棄之如秦・越人」）」だと、それぞれ判断できよう。

以上を押さえ、必要な語句を補って傍線部をわかりやすく訳せば、「あのすぐれた文章家であった玄宗でさえも杜甫と孟浩然を捨て去ったのである。まして六朝時代の凡庸な君主たちなら、なおさらその時代の杜甫や孟浩然に当たる文章家たちを捨て去ってしまうのも当然である」くらいになろう。もちろんこうした表現の前提には、魏の武帝が文章を通して陳琳のことを深く理解し、武帝が陳琳にとっては自分を深く理解してくれている「知己」に他ならなかったという事柄がある。したがって、抑揚形を用いた傍線部には、魏の武帝と陳琳との親密な関係（「知己」の関係）、すぐれた文章家であった唐の玄宗と杜甫・孟浩然との文章を介しての疎遠な関係、そして六朝時代の凡庸な君主たちとその時代のすぐれた文章家たちとのさらに疎遠な関係、という三重の対比関係が含まれているのである。

この問題の選択肢はすべて六朝時代の文章家たちを主語として説明しているが、基本的な対比関係は変わらない。六朝時代の文章家たちは、その時代の君主たちが凡庸な分だけ、すぐれた文章家であった唐の玄宗と杜甫・孟浩然との疎遠な関係以上に疎遠な関係であったことが推察できるだろう。それは陳琳と魏の武帝の関係とははるかに遠く隔たったものであったと言えるはずである。こうした内容をそなえている選択肢は、①「六朝時代の詩人や文章家たちは、時の皇帝たちにほとんど理解されず、魏の武帝と陳琳のような関係を築くことはできなかった」しかない。したがって、①が正解である。

他の選択肢も確認しておこう。②「六朝時代の詩人や文章家たちは、時の皇帝たちに高く評価されたので、唐の玄宗と杜甫・孟浩然との関係とは異なった関係にあった」は、「時の皇帝たちに高く評価された」という点が誤りである。③「六朝時代の詩人や文章家たちは、唐の玄宗のような庇護者がいなかったため、その作品は杜甫・孟浩然ほどには評価されていない」は、六朝の君主たちについての「庇護者」という位置づけ、さらに「作品」の「評価」という点が本文とずれている。④「六朝時代の詩人や文章家たちは、時の権力者たちの保護を受けて高い地位に就いたものの、陳琳ほど後世に名を残してはいない」は、まったく本文には触れられていない事柄である。⑤「六朝時代の詩人や文章家たちは、唐の杜甫・孟浩然以上の才能にあふれていたが、それを認めてくれる皇帝にめぐり合えなかった」は、「唐の杜甫・孟浩然以上の才能にあふれていた」が、やはり本文の内容とは無縁のものである。